

# 大坂城跡

VIII

平成18年度学校法人追手門学院による  
建設工事に伴う大坂城跡発掘調査報告

2007.5

財団法人 大阪市文化財協会

## ごあいさつ

追手門学院は、1888年(明治21年)大阪偕行社附属小学校として発足し、第2次世界大戦後の再出発に当たってその立地する大坂城の正門にちなんで「<sup>おうてもん</sup>追手門」という校名になっております。

本学院は、2008年の創立120周年記念行事の一環として追手門学院大手前中高等学校の校舎を建て替えることになり、多くの遺構をかかえる敷地の発掘調査を(財)大阪市文化財協会に依頼して実施しました。本書はその報告書です。数々の出土品から古い歴史を有する土地であることが立証されました。発掘調査や報告書作成の労をとられた方々にお礼を申し上げます。

私どもは由緒ある大坂城三ノ丸跡地で学べることを誇りに思って、今後一層努力して参りたいと思っております。

追手門学院長・大学長 鈴木 多加史

### 例言

一、本書は大阪市中央区大手前1丁目の学校法人追手門学院による建設工事に伴い実施した発掘調査(OS06-7次、OSは大坂城跡を示す)の報告書である。

一、発掘調査と報告書作成の費用は学校法人追手門学院が負担した。

一、発掘調査および本書の作成は、財団法人大阪市文化財協会文化財研究部次長南秀雄の指揮のもと、同部学芸員杉本厚典が担当した。

一、発掘調査で出土した遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。

一、発掘調査や報告書作成に当たっては、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会よりご協力を賜った。

一、動物骨の分析は大阪市立大学大学院医学研究科安部みき子氏、魚骨の分析は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター環境考古学研究室室長松井章氏と京都大学大学院人間・環境学研究科丸山真史氏より玉稿を賜った。また、貝の分析は当協会文化財研究部学芸員池田研が行った。

一、追手門学院大学考古学研究会(顧問 吉田浩幸)部員の発掘調査実習を受け入れた。

一、本調査地の基準点測量・空中写真測量はアジア航測株式会社に委託した。

一、遺物撮影の一部は内田真紀子氏に委託した。

### 凡例

1. 遺構名の表記は、石垣(SW)、塀・柵(SA)、建物(SB)、柱穴(SP)、土壙(SK)、溝(SD)、塀(SM)、炉(SF)、井戸(SE)、その他の遺構(SX)の略号を使用した。

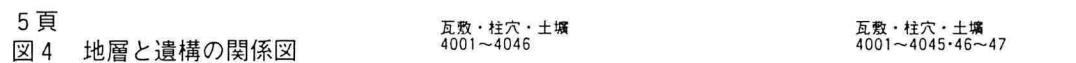
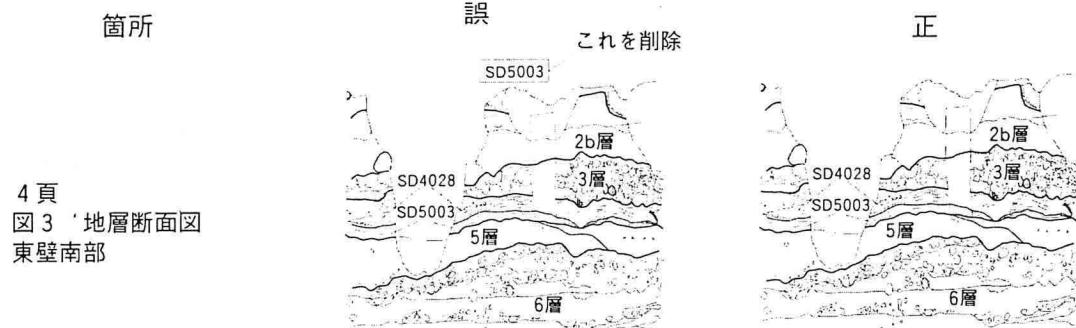
2. 本書で用いた方位は座標北で、座標値は世界測地系に基づく。また、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いた。

### 目次

#### ごあいさつ

1. これまでの調査 .....	1	4-4. 徳川期の遺構 .....	22
2. 調査の経緯と経過 .....	2	4-5. 出土遺物 .....	25
3. 基本層序 .....	3	5. 自然科学分析 .....	39
4. 遺構と遺物 .....	6	5-1. 哺乳類・鳥類の骨の分析 .....	39
4-1. 豊臣前期 .....	6	5-2. 魚骨の分析 .....	43
4-2. 豊臣後期 .....	7	5-3. 貝の分析 .....	47
4-3. 大坂夏ノ陣前後の遺構 .....	16	6. まとめ .....	48

正誤表





## 1. これまでの調査

調査地は上町台地の北端に近く、上町筋東側の追手門学院学校敷地内に位置する(図1)。この地点は1598(慶長3)年から翌年にかけて造成された大坂城三ノ丸の北辺部に当り、大坂ノ陣の頃には「ササノ丸」と呼ばれた場所である。

大坂城三ノ丸北辺では、これまでに徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構発掘調査団、追手門学院校地学術調査委員会、大阪府教育委員会、(財)大阪市文化財協会によって大坂本願寺期、豊臣期、徳川期の調査がなされてきた(註1)。

大坂本願寺期の遺構は大阪市文化財協会OS83-15次調査地で礎石建物と溝、大阪市文化財協会OS90-58次調査地で大川の護岸石垣が検出されている[大阪市文化財協会1988・2002]。前者では1580(天正8)年、石山合戦後に顯如らが紀州へ退去した時の火災で生じた焼土層も見つかっている。

豊臣前期の遺構は大川の護岸が徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構発掘調査団1975年調査地から大阪市文化財協会OS90-58次調査地にかけて見つかっている。また、大阪府教育委員会によって1989・90年に実施された大阪府立女性会館(ドーンセンター)調査地では、調査地の中央で両側に幅0.7mの側溝をもつ幅3.5mの道路が南北方向に延びており、その東西にそれぞれ3区画ずつ屋敷地が検出された。屋敷地では建物礎石が見つかったほか、短刀・小柄が出土し、武家屋敷と考えられている[宮崎泰史1993・黒田慶一2005]。

三ノ丸の造成時にこれらの武家屋敷は埋められ、東西方向に石垣が築かれる。この石垣は大阪市文化財協会OS83-15次調査地から大阪府教育委員会の実施したドーンセンター調査地まで約150mにわたって延びていた[大阪市文化財協会2002]。造成された三ノ丸の上に設けられた遺構としては、追手門学院1980年調査地で廃棄土壙が見つかってい



図1 今回の調査地とこれまでの調査地



写真1 移築された三ノ丸の石垣

るほか[追手門学院校地学術調査委員会1982]、大坂夏ノ陣の焼土層が同調査地をはじめとする各調査地で見つかっている。

徳川期の遺構は大坂城外郭関連石垣遺構発掘調査団1975年調査地で大川の護岸が検出され、大阪市文化財協会OS88-78次調査地で倉庫とみられる礎石建物、追手門学院1980年調査地では石組遺構が見つかっている。とりわけ礎石建物は1616(元和2)年～1651(慶安4)年まで青物市が行われた淀屋<sup>こあん</sup>个庵の屋敷の一部に当ることが絵図や文献から推測されている[宮本佐知子1989]。

註)

(1)本書で用いる中・近世の時期区分は、大坂本願寺期を本願寺創建の1496(明応5)年から焼亡した1580(天正8)年まで、豊臣前期を本願寺焼亡より大坂城三ノ丸築造開始の1598(慶長3)年まで、豊臣後期を三ノ丸築造より大坂夏ノ陣の1615(慶長20)年まで、徳川期を大坂夏ノ陣以降とした。



図2 調査位置図

## 2. 調査の経緯と経過

今回の調査地は大阪府教育委員会が1988～91年に実施したドーンセンター調査地と追手門学院校地学術調査委員会が1980年に行った調査地の間に位置する(図2)。校舎建設に先立って大阪市教育委員会による試掘調査が2006年9月7日に行われ、現地表下2.3～2.5mで大坂夏ノ陣の焼土を含む整地層が残っており、その下から建物礎石が見つかった。さらに現地表下3.6m以下で大坂城三ノ丸造成時の盛土層が堆積していることが確認された。これを受け追手門学院と大阪市教育委員会との間で協議が行われ、建物の工事敷まで全面調査することになった。

調査は2006年11月6日より重機による表土掘削を開始し、続いて人力による平面調査を開始した。平面調査は豊臣・徳川期の地層の残る調査地東半が中心となった。11月10日に最初の遺構面となる第1a層上面の遺構を掘上げて全景写真を撮影し、第1c～5層上面の遺構を順次調査した。遺構の多い第4層上面では12月8日空中撮影を行い、検出した遺構の図化を行った。12月7日より大坂城三ノ丸の盛土の掘削を開始した。盛土は2mを超える厚さが想定されたため、重機を併用して作業を行った。盛土の下位に当る第6層の層中で工事敷であるTP+5.0mに達したため、全面調査を終了した。



写真2 実習風景

その後、盛土の厚さとその下の豊臣前期の遺構の状況を確認するために調査区中央に東西10m、南北6.5mのトレンチを設け掘削を行った。その結果、TP+5.5mのところで豊臣前期の建物礎石が存在することを確認し、12月20日に現地での作業を終了した。

調査期間中、11月18日に追手門学院大学の学生による実習を行った。また12月12日に学校関係者を対象とする現地説明会を行った。

### 3. 基本層序

調査地において以下のような地層が明らかになった(図3・4、写真3~6)。

第1a層：焼土や炭の含まれる暗褐色細粒砂の整地層で、層厚は20cmであった。本層より肥前陶器皿45が出土したほか、18世紀頃の肥前磁器が出土した。

第1b層：褐灰色細粒砂の整地層で、層厚は10cmであった。調査地の南部に分布していた。

第1c層：焼土や炭が多く含まれる黒褐色シルト混り細粒砂層で、層厚は10cmであった。本層中には焼土や炭が多く含まれていた。本層より17世紀の肥前磁器の破片が出土したほか、青花碗5・皿6・大皿10、瀬戸美濃焼丸皿15・16・織部向付32・34、肥前陶器灰釉皿47・水指60が出土した。

第2a層：暗灰黄～灰黄色細粒砂の整地層で、層厚は15~30cmであった。本層上面にあったとみられる建物の壁や柵は焼けていた。これらの遺構は陶磁器の年代から大坂夏ノ陣の時に焼けたものとみられる。

第2b層：暗灰黄色細礫混り細～中粒砂の整地層で、層厚は30cmであった。この上面で区画溝や柵の掘形など検出した。第2b層より17世紀初頭とみられる鼠志野向付の細片が出土した。

第3層：4~12cm大の灰色粘土の偽礫で構成される盛土層であった。層厚は第4層上面の標高が高い調査地東側では8cmと薄かったが、低い所では12~45cmと厚く堆積していた。この層の上面には廃棄土壌SK3017や井戸SE3019が設けられていた。

第4層：灰色細粒砂層で、層厚は8cmであった。固く締っており、層厚2~3cmの薄層が縞状に堆積していたため、土を敷き固めて整地した層と判断した。上面で溝SD4028や瓦敷SX4023を検出した。

第5層：黄褐色粗粒砂による大坂城三ノ丸の盛土層で、最大50cmの層厚があった。本層上面でも道路の側溝とみられる南北方向の溝SD5003や道路面にあたるとみられる瓦敷SX5010を検出した。この上面から豊臣後期となる。

第6層：にぶい黄色粗粒砂による大坂城三ノ丸の盛土層で、最大230cmの層厚があった。南東から北西に盛土され、上面は南東から北西に下る斜面を形成し、固く締っていた。本層中より備前焼擂鉢69・瀬戸美濃焼天目碗26が出土した。

第7a層：オリーブ黒色の腐植土層で層厚は1cmであった。層中より金箔押熨斗瓦173・174が出土した。本層以下では肥前陶器・瀬戸美濃焼志野は出土しておらず、第7a~9層は豊臣前期に相当する。

第7b層：オリーブ灰色中粒砂混り細粒砂の整地層である。豊臣前期の建物礎石と溝を覆って堆積しており、層厚は20~50cmであった。本層より金箔押桐紋飾瓦166が出土した。

第8a層：黒色シルト層で、層厚は2~4cmであった。

第8b層：灰色細粒砂層で、層厚は15cmであった。第8c層上面の礎石を覆う整地層である。

第8c層：オリーブ黒色細粒砂層で、層厚は10cmであった。本層上面に礎石が置かれていた。

第8d層：オリーブ黒色シルト混り細粒砂層で、層厚は8cmであった。

第8e層：灰色細粒砂層で、層厚は8cmであった。

第9層：灰色中粒砂層で、層厚は20cm以上あった。この層の上面に礎石が据えられていた。

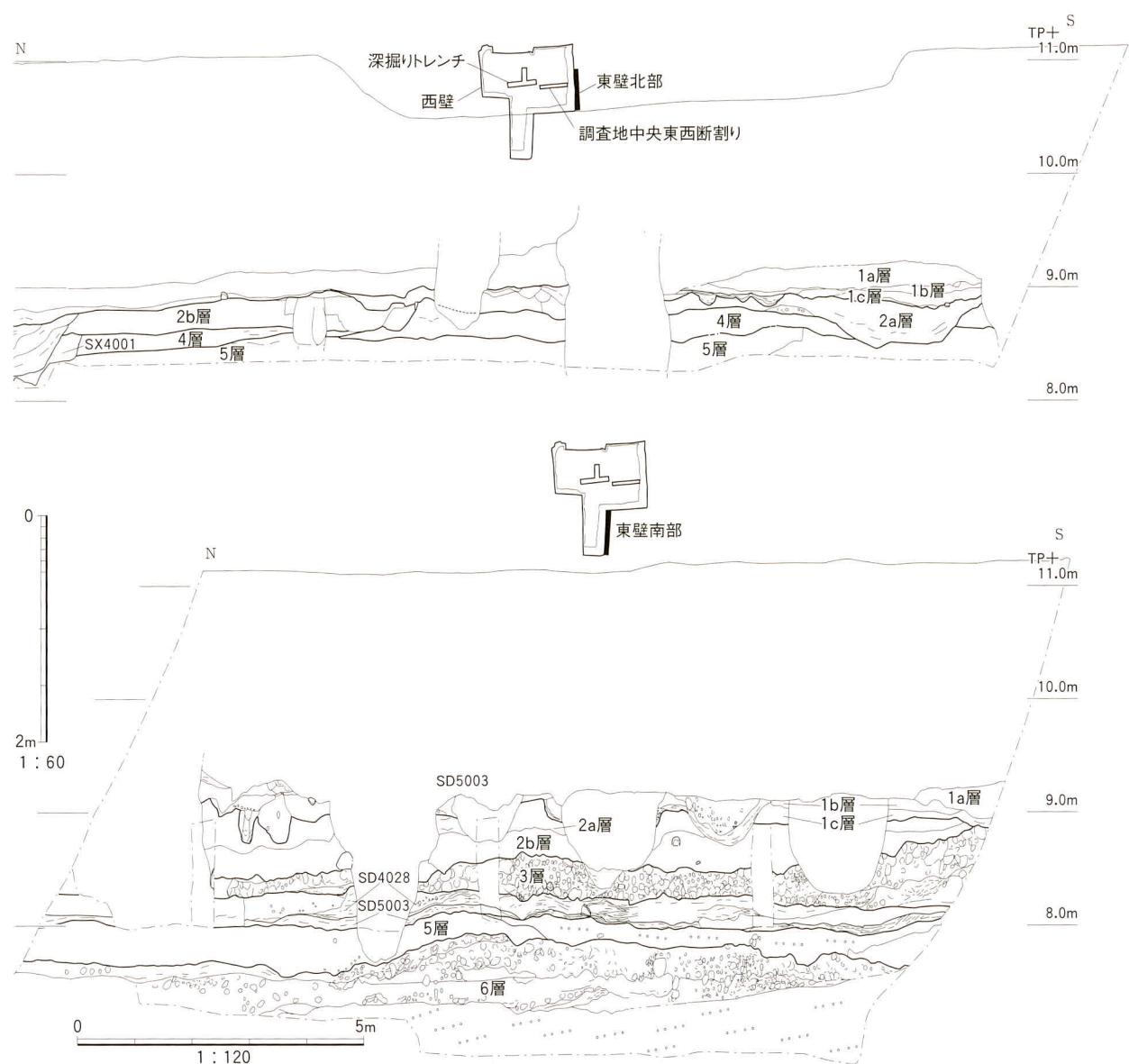
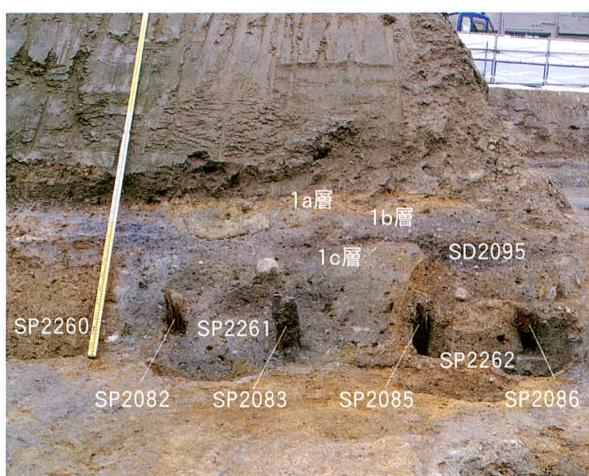


図3 地層断面図



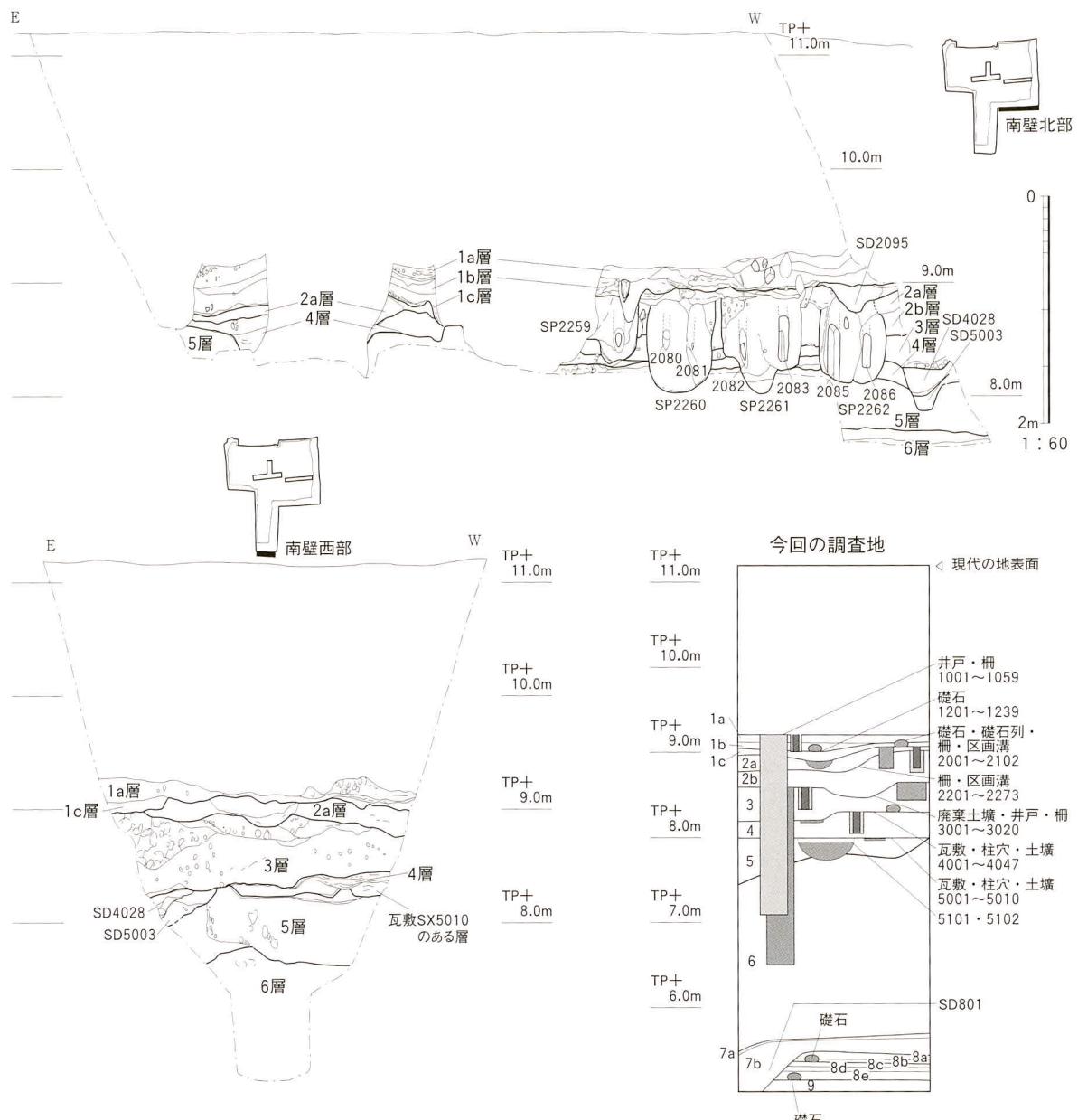


図4 地層と遺構の関係図



写真5 西壁(北東から)

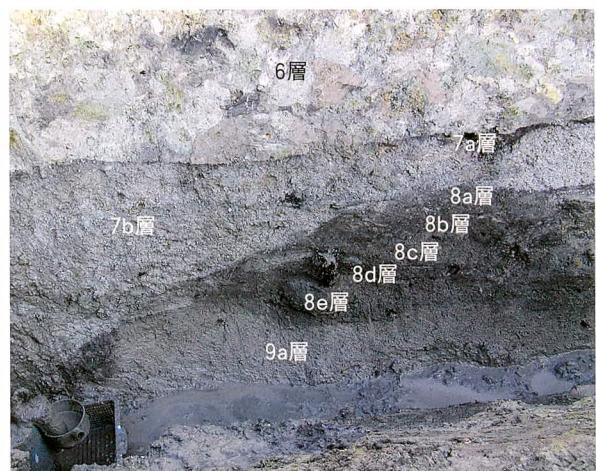


写真6 深掘りトレンチ(南から)

## 4. 遺構と遺物

### 4-1. 豊臣前期

#### a) 第9・8c層上面の遺構と第7層の遺物(図5、写真7～9)

第9層上面で建物礎石を1個、第8c層上面で建物礎石3個、第8a層上面で溝とみられる遺構SD801を確認した。礎石は直径25～40cm、高さ12～20cmの大きさで、1.0～1.2m間隔で並んでいた。SD801は南北方向に延びており、幅0.9m以上、深さ0.4mであった。

これらの遺構の周辺からは、瓦・瀬戸美濃焼・備前焼・土師器皿などが出土したほか、第8a層からは金箔押桐紋飾瓦168・169と同熨斗瓦172・175、第7a層から金箔押熨斗瓦173・174、第7b層から金箔押桐紋飾瓦166が出土した。これらの遺構・遺物から、第9層および第8c層上面には武家屋敷が建っていたものと推測される。

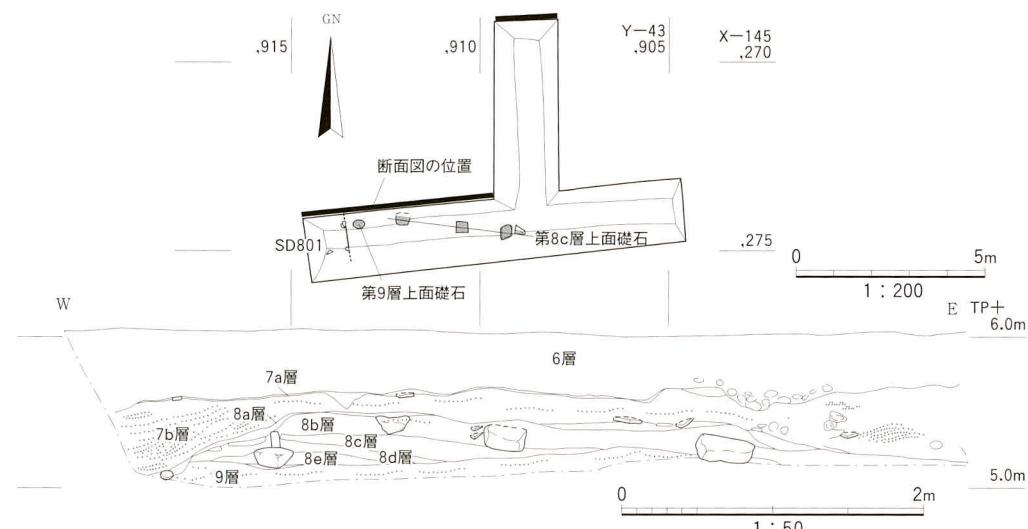


図5 第8c層上面の礎石と溝・9層上面の礎石(平・断面図)



写真7 第8c層上面の礎石



写真8 第7a層出土の金箔押熨斗瓦174



写真9 第7b層出土の金箔押桐紋飾瓦166

#### 4-2. 豊臣後期

##### a) 第5層上面の遺構(図6、写真10)

第5層上面で大溝・溝・柱穴・土壙・落込み・瓦敷を検出した。大溝SD5101は幅6.5m、深さ0.9mで、北約30°西方向に延び、埋土は淘汰のよい白色極細粒砂であった。溝底に機能時堆積層は認められなかったため、掘上げてから埋戻しまで短期間だったとみられる(写真10)。溝底より備前焼鉢64、瀬戸美濃焼天目碗27が出土した。南北6m以上の落込みSX5102もSD5101と堆積状況が類似する。

SD5101・SX5102が埋められたのち、溝や小穴・土壙が掘られていた。SD5003は幅1.3~2.0m、深さ0.3mの溝で、溝底に褐色粗粒砂混り中粒砂が溜まったのち、暗灰色細粒砂で埋戻されていた。また、SD5003の西側には瓦敷SX5010が設けられていた。5cm角に割った瓦を面を揃えて敷いており、SD5003の西側に帶状に分布することから、道路面を形成していたとみられる。また、SP5008から17世紀初頭に位置づけられる瀬戸美濃焼折縁内禿皿13が出土した。

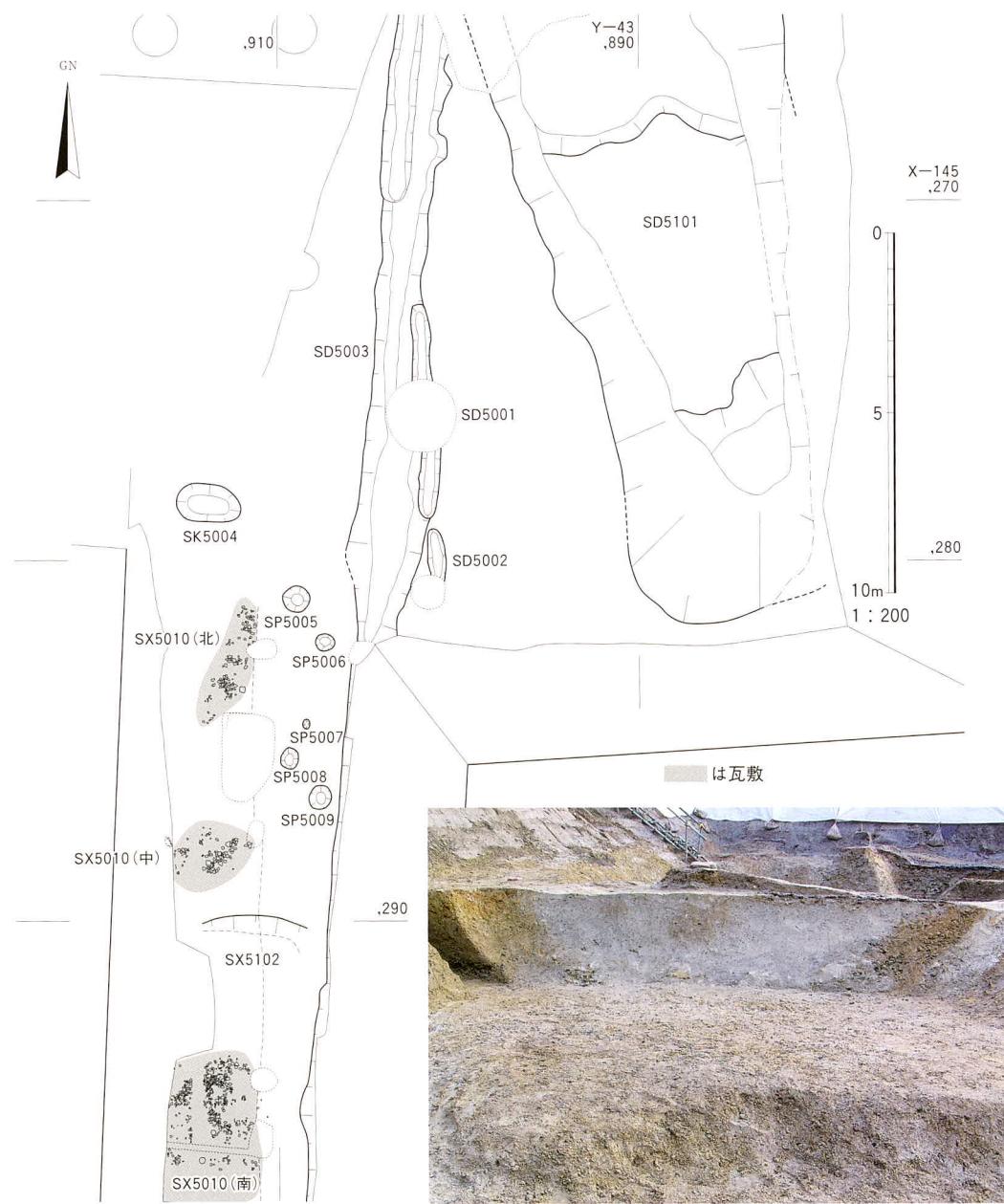


図6 第5層上面の遺構

写真10 SD5101断面(北北西から)

b) 第4層上面の遺構(図7、写真11~15)

第4層を用いて第5層の遺構を埋め、土を敷き固めて整地したのち、調査地の中央には南北方向の溝、東側には屋敷地とみられる区画が設けられた。



図7 第4層上面の遺構



写真11 調査地東部の第4層上面の遺構(北西から)



写真12 SD4028とその周辺の遺構(北から)



写真13 瓦敷SX4023(西から)



写真14 瓦敷SX4023とそれを埋めた第3層(南から)

SD4028は幅2.3m、深さ0.4mの溝である。灰色砂質粘土が溝底に溜まったのち、第3層で整地する際に、褐色細礫混り細粒砂と10cm大の灰色砂質粘土の偽礫で埋め立てていた。溝の機能時に堆積した砂質粘土は南側のものほど泥質であり、溝底より瀬戸美濃焼折縁内禿皿14、軒丸瓦148のほか、曲物や漆器椀117などが出土した。

SD4028の西側には浅い溝や小穴・炉があったが、全体的に土を敷き固めており、第5層上面と同様、道路面であったとみられる。炉SF4046は直径0.5mの窪みであり、壁が赤く焼け凹みに炭が溜まっていた。

調査地東部には東側が約0.3m高い段差があった。SD4028から段差までの幅6mの区間にも土を敷き固めており、段差の下には瓦敷SX4023が認められた(写真13・14)。SX4023は南北5m、東西2.2mの範囲に5cm大に割った瓦を面を揃えて敷きつめていた。

段差より東の平坦部には礎石とみられる偏平な礫や柱穴・小穴が認められたが建物を復元するには至らなかった。柱穴の中にはSP4014のように人頭大の礫が多数含まれるものもあった。調査区北半北東部には段差に沿って南北方向に柱穴とみられるSP4020・4021・4022が設けられていた。これらは2~5cm大の灰黄褐色シルトの偽礫を含む黄褐色細粒砂で埋戻されていた。SP4020~4022は敷地の西辺を区切る柵SA4047を構成していたと推測される。





### c) 第3層上面の遺構(図8・9、写真16~23、表1)

第4層礫上面の遺構は灰色粘土の偽礫を多く含んだ第3層で埋められる。この3層の上面には東西方向の柵や井戸・柱穴・土壙・小穴が設けられていた。

柵SA3020は調査地の北半で検出した。直径約0.6mのSP3004~3009で構成され、それらの多くが1.5~3.0m間隔で東西方向に並んでいた。深さは深いもので0.68mあったが柱痕跡は認められなかった。

井戸や土壙はこの柵の南側で検出した。井戸SE3019は直径3.1m以上の円形の掘形で、深さは1.6m以上あった。井戸側として曲物が使用されていた。土師器大皿97・98、軒平瓦164などが出土した。

土壙は10基を検出した。円形が2基(SK3010・3018)、長方形が1基(SK3017)、不定形が6基(SK3011~3016)であった。このうち有機物が多く、廃棄土壙とみられる土壙は長方形のものと不定形のものとであった。

不定形の土壙は調査地北半南東部に多く認められた。これらの土壙は長径0.55~1.50m、深さ0.19~0.52mであった。SK3011~3013、SK3015・3016のように不定形の土壙は複数がまとまって設けられていた。SK3011・3013は切合いをもっており、SK3013がいったん埋まってからSK3011を掘直していた。調査地北半南東部の空間が廃棄場所として継続的に用いられていたとみられる。SK3014より肥前陶器灰釉皿39、土師器皿79が出土した。

調査区北半南東部に設けられた廃棄土壙が不定形で小規模であったのに対して、調査区中央の長方形の廃棄土壙SK3017は大型であり、単独でほぼ正方位に設けられていた。この土壙は東西4.8m、南北3.1m、深さ0.6mであり、埋土は3層に分かれた。下層は壁際に灰色シルト、中央にオリーブ黒色粘土層が堆積していた。壁際の灰色シルト層は斜面に沿って堆積しており、側方からの流れ込みとみられる。中層は細粒砂混り黒色シルト層で腐植物を多く含んでおり、多数の箸が出土した。上層は灰色細粒砂で1~2cm大の偽礫が多く認められ、埋戻しによる地層である。このような堆積状況からゴミが棄てられたのち、埋戻しが行われたことがう

かがえる。

下層のオリーブ黒色粘土には陶磁器や木製品のほか、動物骨・魚骨・植物種子などが含まれていた。調査時に有機質微細遺物が多数含まれていることが想定されたため、下層の土をほぼすべて採取した。採取した土は土嚢袋70の量にのぼった。これらを水漬けしてほぐし、1mmの篩にかけて水洗したところ、多数の動物骨・魚骨・植物種子を抽出することができた。

出土した遺物には下駄や人形なども含まれるが、漆器椀・皿や曲物といった木製容器、箸などの食事に関するものが多い(表1)。自然遺物には動物骨・魚骨・貝類・植物種子などがあった。動物骨・魚骨・貝類について、詳細は後述の分析結果を参照されたい。ここではその概要について述べる。

哺乳類はクマネズミ属・シカ・ウマ・イヌ、鳥類はニワトリとみられるキジ科・カモ科・サギ科が出土している。ネズミ以外は食用の可能性が指摘されており、イヌやキジ科には若い個体が多い傾向があり、カモ科に切断痕のあることが明らかにされている[安部みき子、本書pp.39-42]。

魚類はマダイ・シイラ・マダイなどを含むタイ科・マダラ・キダイ・フグ科・アジ科・カマス科などが出土し、食物相が多様であり、秋から冬に獲られた可能性が指摘されている[丸山真史・松井章、本書pp.43-46]。また、体長30cm以上の中型から大型のマダイに、正中方向に切断される「兜割」の痕跡が顕著であり、頭部を利用した料理の可能性が指摘されている[同上]。

貝類はサザエ・ハマグリ・アカガイ・アカニシ・イタボガキ・アワビ類・ハイガイ・バイなどが出土しており、遠隔地から持ち込まれた多数の鹹水性種から構成されることが指摘されている[池田研、本書p.47]。

出土した陶磁器・土師器・木製品の中で、図化した遺物は青花小杯1・2・端反碗3、瀬戸美濃焼天

表1 SK3017出土の陶磁器・土師器・木製品

木製品	箸	1659点	漆器	6
	下駄	4	漆器大型椀	6
	クサビ	1	漆器中型椀	6
	ヘラ	29	漆器小～中型椀	2
	櫛	2	漆器小型椀	3
	建築部材	12	漆器小型皿(高)	3
	木簡	1	漆器小型皿(低)	4
	木釘	1	漆器小型皿(高低不明)	2
	人形	2	磁器	
	箕	1	青花小杯	2
	栓	8	青花端反碗	1
	不明	1	瀬戸美濃焼志野鉢	1
木製容器	折敷(小型)	3	瀬戸美濃焼志野向付	2
	折敷(中型)	4	瀬戸美濃焼天目碗	1
	折敷(大型)	1	瀬戸美濃焼丸皿	1
	桶	4	軟質施釉陶器碗	1
	曲物小型側板	1	肥前陶器向付	4
	曲物小型底板	9	肥前陶器皿	3
	曲物大型側板	1	肥前陶器小杯	1
	曲物大型底板	1	肥前陶器碗	1
	曲物中型側板	3	備前焼茶入	1
	曲物中型底板	9	備前焼徳利	1
	漆器膳足	2	丹波焼大平鉢	4
	漆器折敷	1	土師器皿	16
	漆器曲物大型底板	1	土師器灯明皿	6
	漆器曲物中型底板	1	土師器焼塙壺	4
	漆器椀蓋(中型椀に対応)	3	土師器焼塙壺蓋	2
			土師器羽釜	1

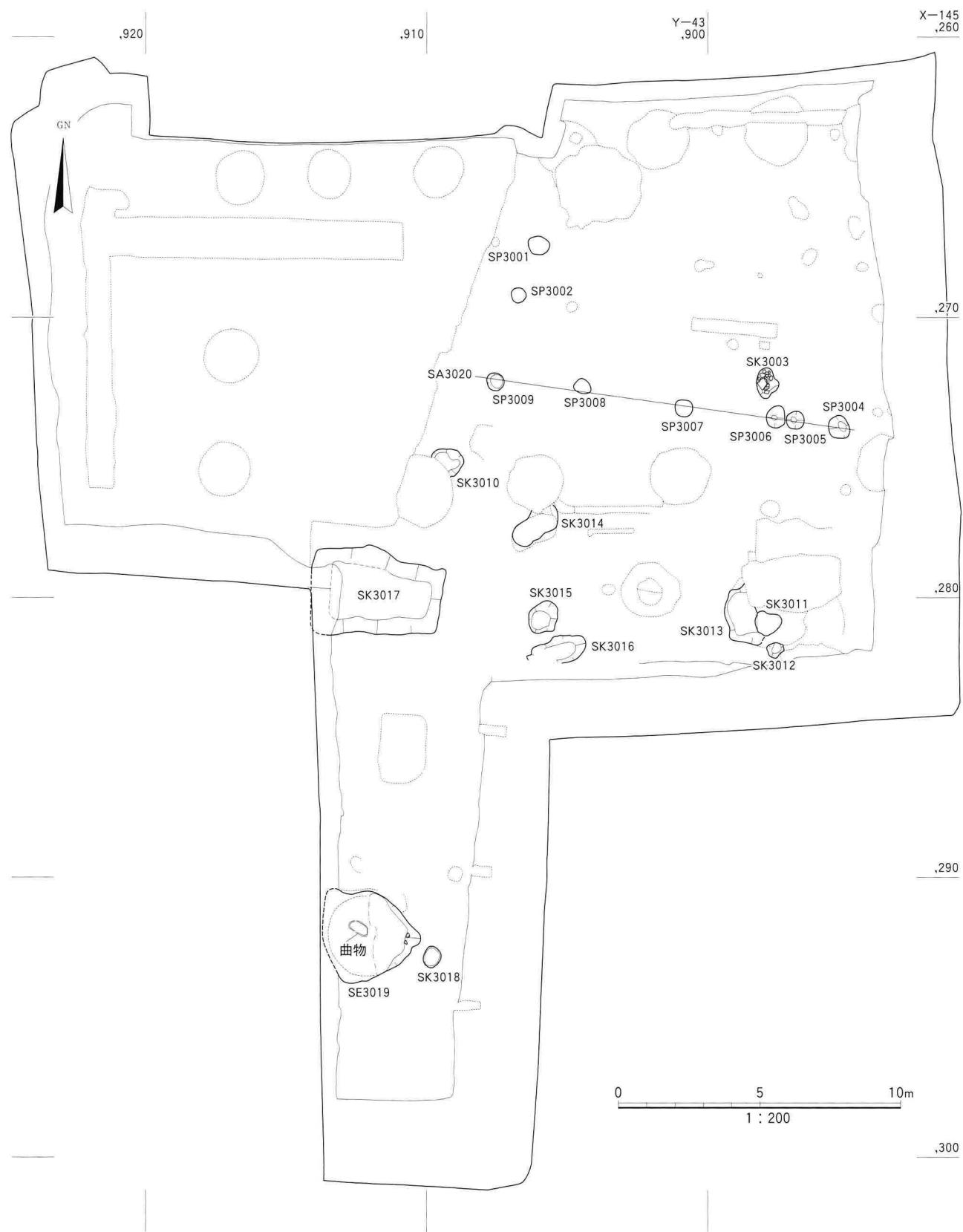


図8 第3層上面の遺構

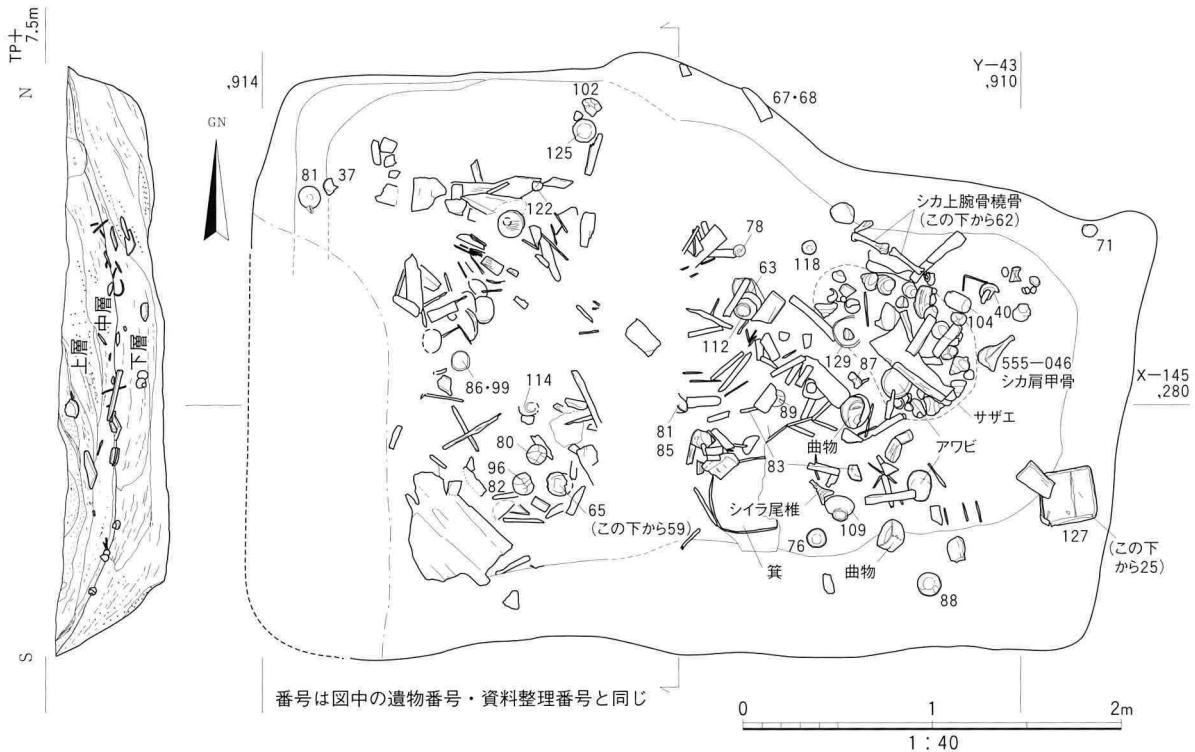


図9 SK3017平面・断面図

目碗25・内禿皿17、瀬戸美濃焼志野向付23・鼠志野向付35・36、肥前陶器皿37・38・40・小杯48・碗51・向付56～59、備前焼茶入62・徳利63、丹波焼大平鉢65～68、土師器皿71・72・76～78・80～90・96・焼塩壺102～105・焼塩壺蓋100・101・羽釜99、漆器大型椀106～109・中型椀110～113・小型椀114～117・蓋118～120・皿121～126、折敷127・128・曲物129・下駄132・人形137・138・木簡136である。これらの遺物の中で最も新しいものは大窯第4期段階末期に位置づけられる瀬戸美濃焼鼠志野向付であり、1600年代後半から1610年代初頭以前の年代が与えられている〔藤澤良祐2002〕。

漆器椀には大型と中型とがあり、中型の椀には蓋が伴うとみられる。サイズの違いは飯や汁といった用途の違いと考えられる。また、箸は完形品が149点、破片が1,510点出土した。完形品の長さの平均値は24.7cmであり、破片の総延長は17637.9cmであった。総延長を完形品の長さの平均値で割ると864点となり、432膳の箸が棄てられていたと推測される。また、この土壙とその周辺からは箸置きとなる耳皿は出土していない。

これらのことと総合すると、漆器椀・土師器皿・絵の描かれた向付などに、山海の食材からなる料理が盛りつけられ、箸をそえて各品を折敷の上に載せるといった、膳立ての整った食事がなされていましたと想像される。また、供膳具か調理のための容器かその用途について明らかではないが、直径40cmと大型の丹波焼大平鉢が4点出土している。

以上のように食器の組成や出土した動物・魚・貝の様相から、SK3017は日常的な食事というよりも、会席のような食事の残滓を棄てた土壙と考えられる。

このように第4層の遺構を埋戻したあとも、建物跡は見つかっていないが、柵で区画し、その南側では生活が営まれていたことがうかがえる。



写真16 SK3017(東から)



写真17 SK3017遺物出土状況(東から)



写真18 SK3017断面(東から)



写真19 シイラ尾骨とその周辺(上が北)



写真20 シカ上腕骨(右)・橈骨(左)とその周辺(上が南)



写真21 漆器椀109とその東の曲物(上が北)



写真22 箸出土状況(東から)



写真23 遺物取り上げ状況(南東から)

#### 4-3. 大坂夏ノ陣前後の遺構

第2層では第2a層と第2b層の上面で遺構の検出を行った。第2a層の上面では、以下に記すように大坂夏ノ陣の時に焼け落ちた建物や柵が見つかっている。第2a層上面の遺構と第2b層上面の遺構とは遺構の位置や方向などに共通点が多く連続性が高い。

##### a) 第2b層の遺構(図10・12、写真24・26)

調査地北半南側に東西方向に柵が設けられ、その北には溝によって方形に区画された空間があった。

柵SA2273はSP2259～2267よりなる。長径0.6～0.7mの楕円形の穴に直径16cmの柱を2本入れたもので、0.3m間隔で東西方向に延びていた。また柱の多くは第2a層で柵SA2102の柱跡として掘下げたSP2080～2094と一致しており、第2b層上面において柱を据える穴を掘込み、柱を入れた後に穴を埋めて固定し、第2a層で整地したものと判断される(図3、写真3)。

方形の区画は幅0.3m、深さ0.1mの溝SD2245によって囲まれていた。その内側で浅い溝SD2254～2257を検出したが礎石は認められなかった。

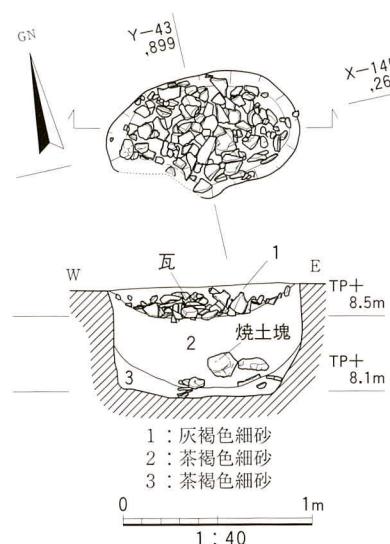


図10 SK2204平面・断面図



写真24 SK2204(南から)

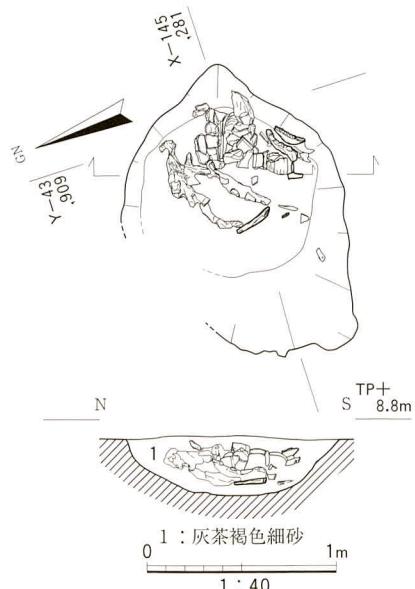


図11 SK2070平面・断面図



写真25 SK2070(北から)

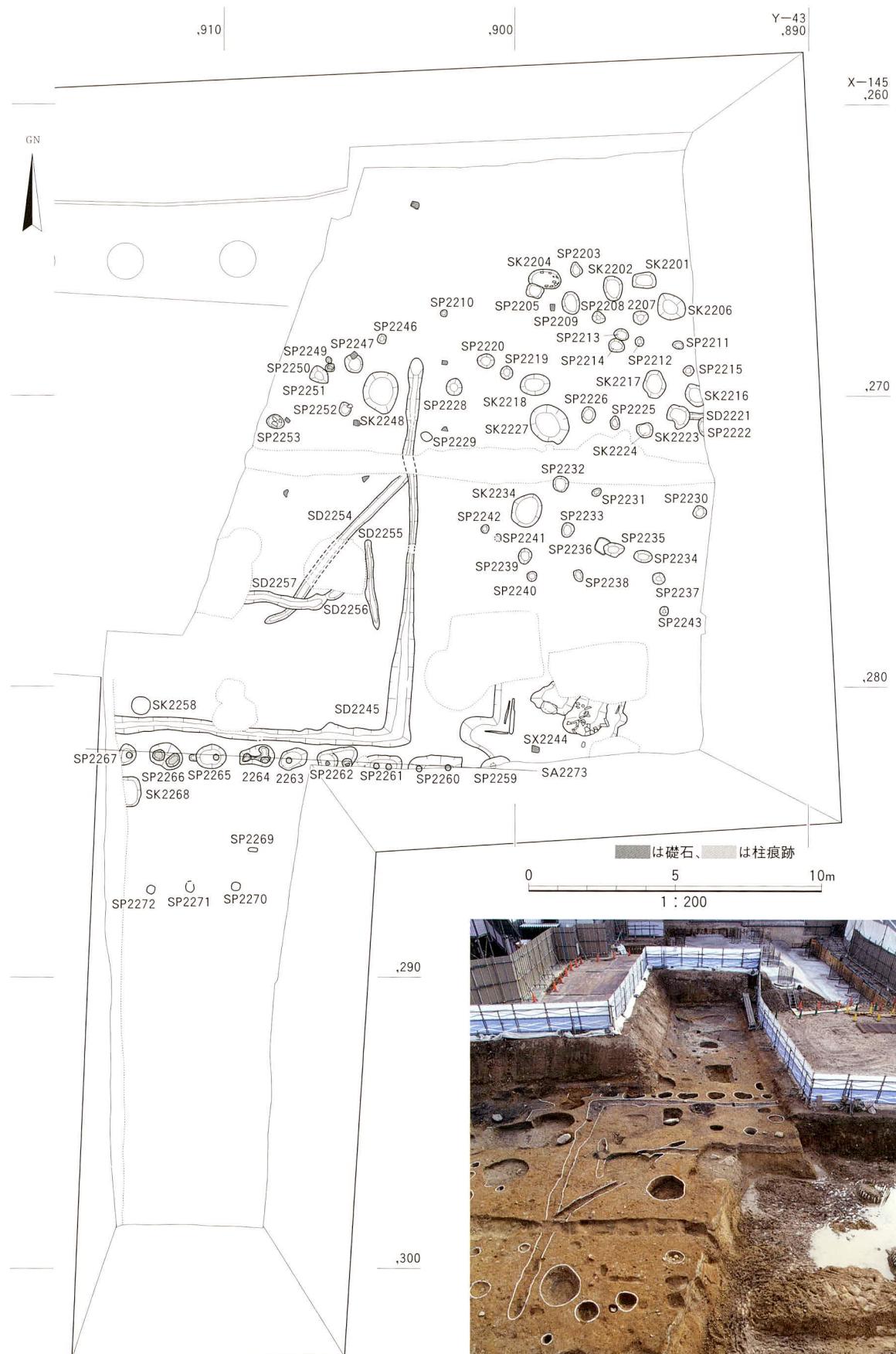


図12 第2b層上面の遺構



写真26 第2b層上面の遺構(北から)

調査地北半南東部には不定形の廃棄土壙SX2244が設けられ、その西辺の立上りには板材が横に置かれていた。埋土から青花皿8・瀬戸美濃焼志野丸皿20・肥前陶器碗54・土師器皿73が出土した。第3層上面でも同じ場所に同様の廃棄土壙が見つかっており、第2b層によって整地された後もゴミを棄てるスペースとして用いられていたことがうかがえる。

また、調査地北半北西部には瓦の細片を棄てた土壙SK2204が設けられていた。瓦と共に中国製磁器色絵皿7・大皿9、瀬戸美濃焼折縁皿12が出土した。

b) 第2a層上面の遺構(図11・13・14、写真25・27~35)

本層上面に瓦組みの区画溝・瓦敷の溝・瓦敷の排水溝・礎石列・柵・土壙などが設けられていた。

土壙SK2070は、第2a層を掘下げる過程で輪郭が明確になり、第2a層上面のSP2075に切られ、第2b層上面のSD2245を切っていたため、第2a層の整地作業中に掘られたとみられる。埋土中より土師器皿75が出土したほか、複数個体のウマの骨が見つかった[安部みき子、本書pp.39~42]。

瓦組みの区画溝SD2072は第2b層上面の区画溝SD2245を踏襲しており、平瓦を溝の肩に立てていた。埋土より肥前陶器小杯49が出土した。

このSD2072によって囲まれた区画の北には瓦敷の溝SD2030と排水溝SD2009が設けられていた。SD2030は幅0.48m、深さ0.07mの断面コ字形の溝底に掌大に割った瓦が敷かれており、雨落ち溝の可能性が高い。またSD2030の北1.5mのところからほぼ

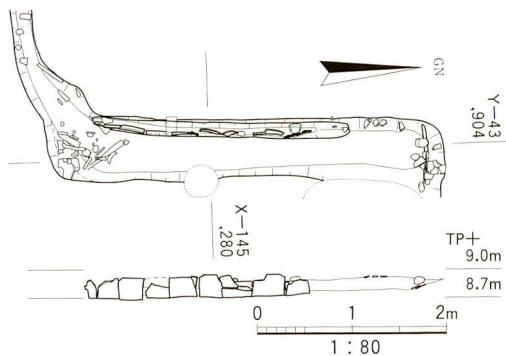


図13 SD2072平面・立面図



写真27 瓦敷の溝SD2030(東から)



写真28 瓦敷の排水溝SD2009(南から)



写真29 瓦組みの区画溝SD2072(北東から)

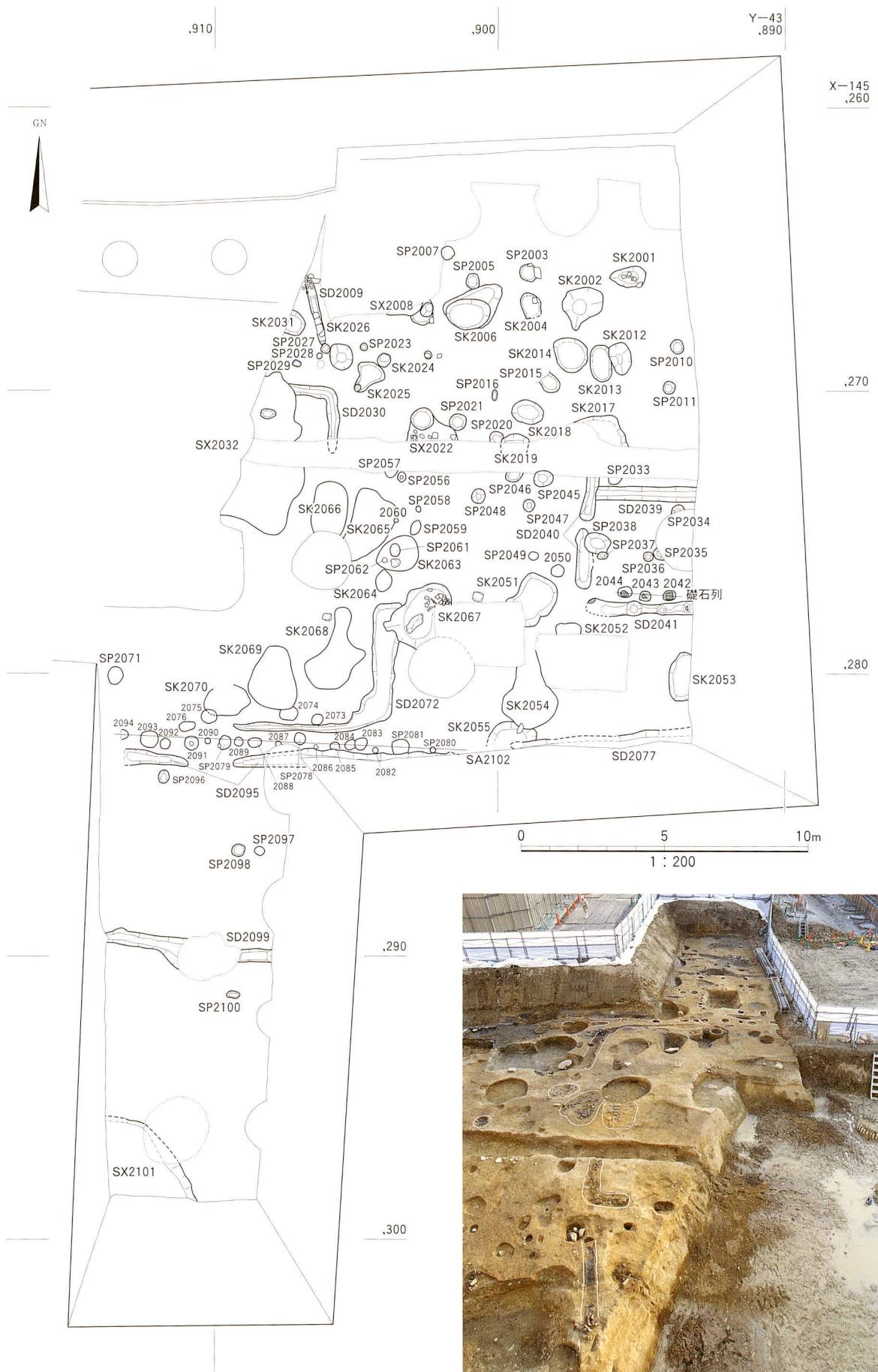


図14 第2a層上面の遺構

写真30 第2a層上面の遺構(北から)



北に向ってSD2009が延びていた。この溝は平瓦の凹面を上にして並べたものであり北に下っていた。SD2072とSD2030によって区画された建物敷地から北の低所部に延びる排水溝と考えられる。

柵SA2102はSP2080～2094で構成され、SD2072の南側に東西方向に延びていた。直径16cmの柱跡が0.3～0.5m間隔で並び、この柱を据えた穴は上述したように第2b層の上から掘込まれていた。柱のうちSP2084・2085のものは焼けていた(図3、写真3)。この柵に平行して、その南側に幅0.60m、深さ0.14mの浅い溝SD2095が延び、さらに南6mの所にはSD2099が設けられていた。SD2095の埋土には焼土・炭が多く含まれ、備前焼擂鉢70が出土した。SD2099からは石臼144が出土した。

調査地北半南東部では礎石列と溝が見つかった(写真31)。礎石列は一辺が15～25cm、高さ10～15cmで0.55m間隔で東西方向に3箇並んだものである。これらは直径0.16～0.20mの小穴SP2042～SP2044に据えられており、上端の高さがTP+8.9～9.0mとほぼ揃っていた。礎石列に平行してSD2039・2041、直交してSD2040が設けられていた。いずれも幅0.4～0.5m、深さ0.1mでSD2039・2040には焼土塊と炭が入っていた。一方、礎石列の南側に平行して設けられたSD2041からは、木舞をもつ焼けた壁土の一部が見つかった(写真32～35)。木舞は炭化しているが、細い竹材を使用して約4.5cm間隔で組まれており、木舞両側は橙色に焼けた粗粒砂混り極細粒砂によって挟まっていた。木舞の下(外側)には橙色に焼けた層厚6cmの粗粒砂混り極細粒砂、3cmの緑灰色シルト混り極細粒砂、1.5cmの暗灰色シルト混り極細粒砂が順次層を成して存在する(写真35)。これらは壁の下(粗)塗、中塗、上塗にそれぞれ対応する可能性がある(註1)。礎石列の上位にあった壁が焼けて南側に倒れ、その一部がSD2041の埋土として残ったと考えられる。SD2041からは肥前陶器皿46・碗53が出土した。

第2a層では火災の痕跡が残された建物や柵の他に、火災後に焼土や焼けた瓦、礎石をまとめて投棄した土壙が多く見つかっている。SK2067～2069はSD2072より後に掘られた廃棄土壙で、深さは0.5～0.8mで不定形であった。埋土より焼土や炭・灰、焼けた瓦や礎石とみられる人頭大の石などが出土した。SK2067より肥前陶器皿43、軒平瓦156・158、SK2068より肥前陶器碗50がそれぞれ出土した。SK2069は土壙底に土師器皿91～95が並べられており、埋土より瀬戸美濃焼織部向付31・33・志野丸皿19・鉢22・高取焼甕61が出土した。また、22はSP2048からの出土片と接合した。

そのほかにも瓦敷の溝SD2030を切って廃棄土壙SX2032が設けられていた。これは南北5.5m、東西2.5m以上の規模で、上述した3基の土壙と異なり浅く面的に拡がっていた。内部にスサを含んだ拳大の焼土塊と焼けた瓦、礎石とみられる人頭大の礎石が出土したため、焼失した建物の廃材を投棄した土壙とみられる。埋土より瀬戸美濃焼志野丸皿18・19が出土した。SD2072やSD2030に囲まれた空間では礎石は見つからなかったが、SX2032が存在することから建物が存在した可能性が高い。

調査地北半北東部のSK2001より瀬戸美濃焼茶入21、SP2006より瀬戸美濃焼志野織部碗30、SP2007より軒平瓦159、SK2019より青花大皿11、SP2022より肥前陶器皿41、SK2031より瀬戸美濃焼織部碗29と軒平瓦153・161、SP2038より瀬戸美濃焼志野小杯24、SK2054より肥前陶器皿44、SK2063より軒丸瓦147・150、SK2066より肥前陶器皿42・碗52・土師器皿74が出土した。

(註)

(1) 大阪歴史博物館学芸員 李陽浩氏の御教示による。

#### 4-4. 徳川期の遺構

焼土や炭を多く含む土で整地を行って形成された第1c層の上面には、徳川氏大坂城期の礎石が点在し、土壙・小穴が掘られていた。この上に第1b・1a層の2層の整地層があり、第1a層の上面には井戸や土壙・小穴が設けられていた。

##### a) 第1c層の遺構(図15・写真36)

調査地北半東～中央部で礎石列を検出した。礎石は直径20～30cm、高さ10～20cmであり、1.4～2.2m間隔で並んでいた。礎石列の南北軸は座標のそれとほぼ合致しており、豊臣期の礎石列や区画溝が座標の南北軸より北3°東に傾く状況とは異なる。土壙や落込みは礎石列の東側に多く認められた。調査地北半北東部の浅い窪みSX1202～1204からは瓦の細片、調査地北半中央部のSK1223・1225からは石材が多数出土し、SD1201より青花碗4が出土した。

一方、調査地南半では柵を検出した。柵SA1239は小穴SP1233～1237で構成され、0.6m間隔で南北方向に並んでいた。SA1239を構成するSP1237より鬼瓦165が、また柵の西に位置するSP1232より宝篋印塔相輪142が出土した。

##### b) 第1a層の遺構(図16・写真37)

調査地北半南側に井戸SE1025が設けられていた。SE1025は直径2.5m、3.4m以上の深さで、第6層にまで達していた。盛土層の崩れやすい部分には、高さ0.92m、直径0.86mの桶を2段に積み、その上に曲物を重ねて井戸側としていた。第3層の井戸SE3019では井戸側を据えるための掘形が大きかったのに対して、SE1025は井戸側と井戸側を据えるための掘形とがほぼ同じ規模であった。SE1025から石臼145、金箔押軒丸瓦170が出土した。170は井戸の下部層から出土しており、第7層以下の遊離資料とみられる。

また、SP1009より寛永通宝が出土した。



写真36 第1c層上面の遺構(北西から)



写真37 第1a層上面の遺構(北西から)

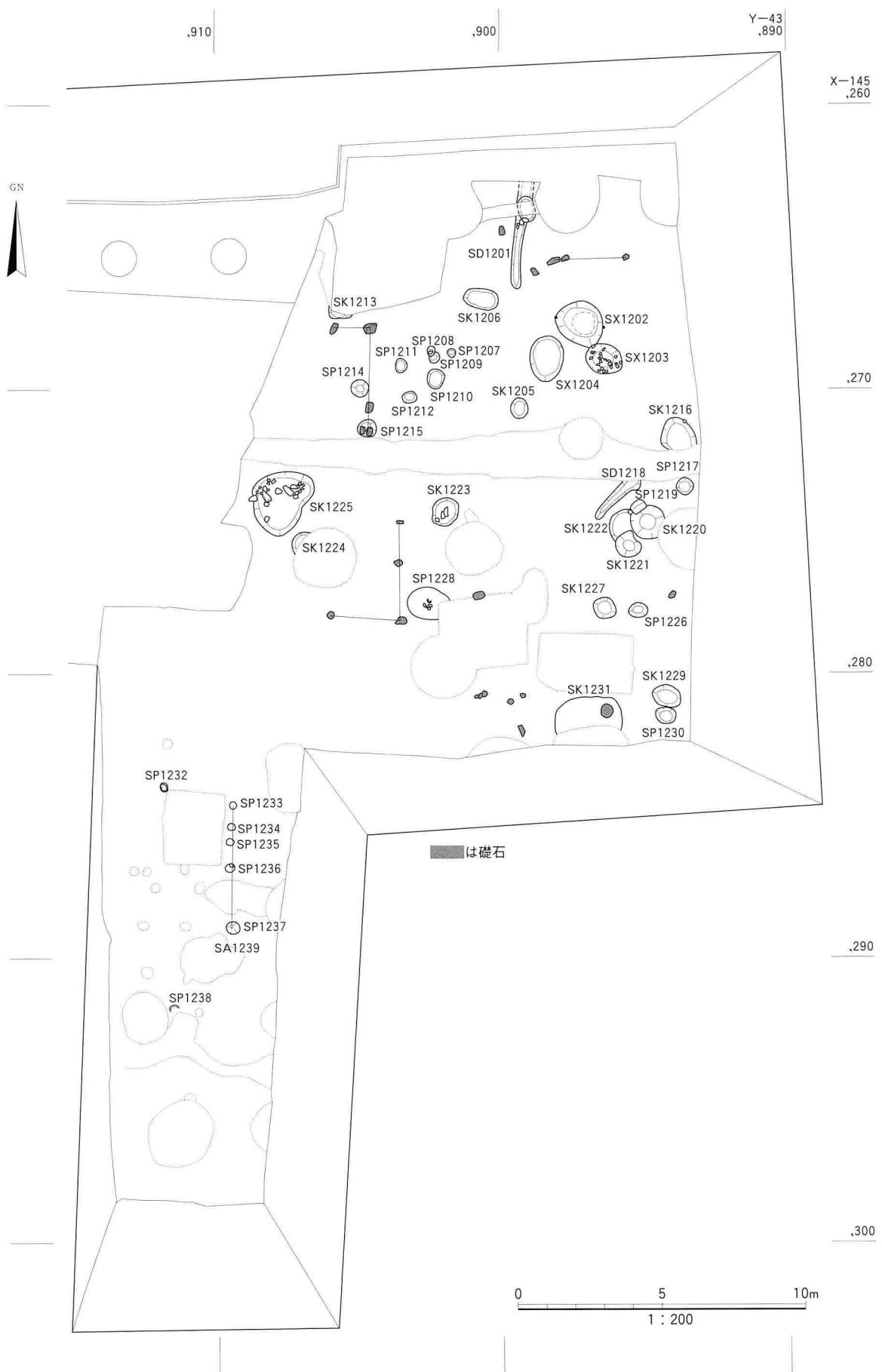


図15 第1c層上面の遺構

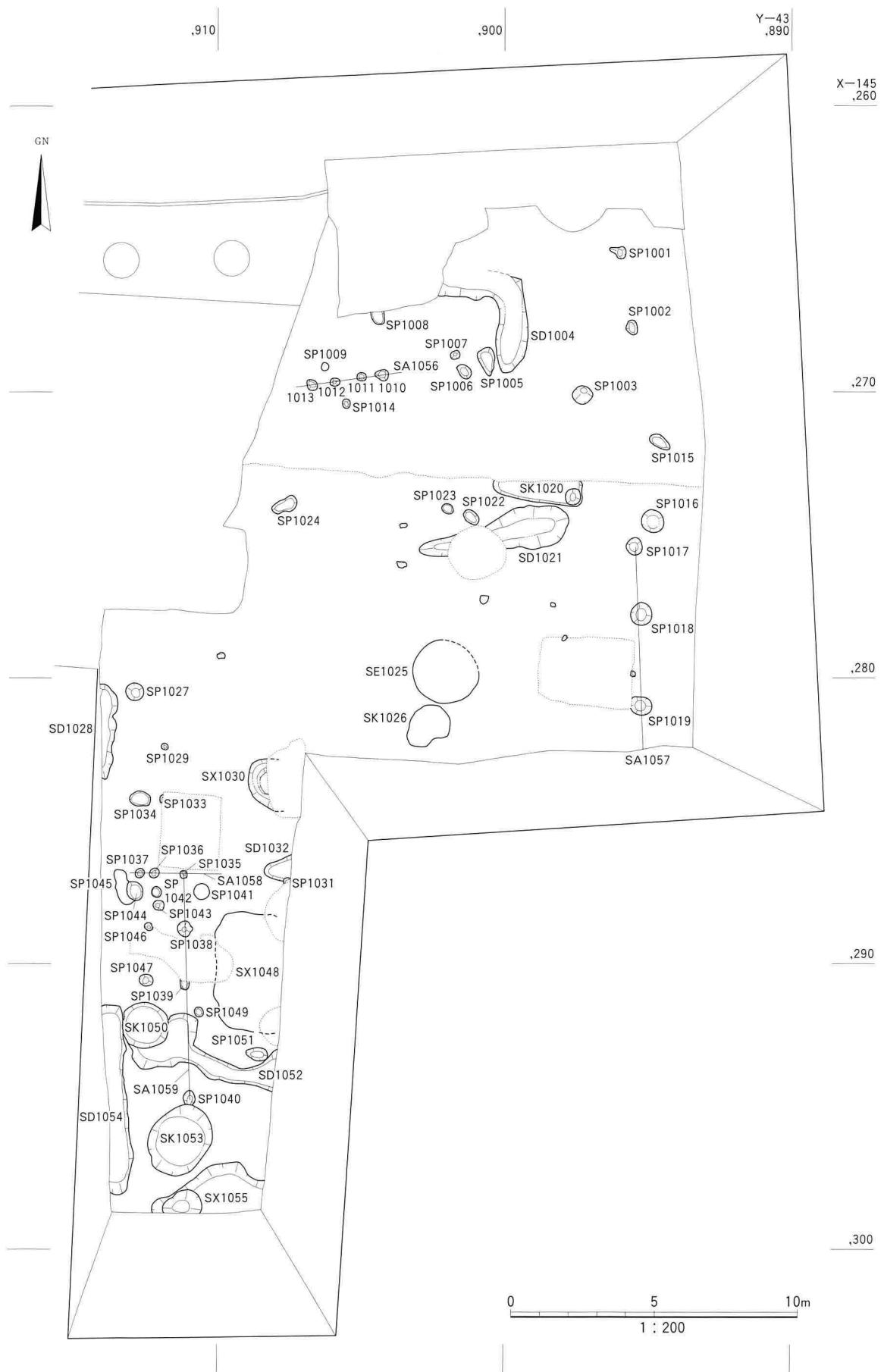


図16 第1a層上面の遺構

#### 4－5．出土遺物

出土した遺物は中国製磁器・国産陶器(瀬戸美濃焼・軟質施釉陶器・肥前陶器・高取焼・備前焼・丹波焼)・土師器・漆器・木製品・石製品・瓦・動物遺存体などである。

##### a ) 中国製磁器(図17)

中国製磁器には色絵7・9と青花1～6・8・10・11がある。また、それらには精緻な作りの景德鎮窯系(1～4・6)のものと漳州窯系(5・7～11)のものとに分類される。

7は色絵皿である。二次的に火を受けて絵付けの釉薬が溶けているが、口縁部内面には青海波文が認められる。底部付近に砂が厚く付着する。9は大皿である。口縁部内面には四方櫛文が描かれ、立ち上がり部分には長円形の区画が描かれる。二次的に火を受けて変色している。

1は小杯で口縁部外面に圈線を巡らし、草花文を描く。2は小杯の高台部分で、見込みには圈線を巡らせ内側に文様を描く。高台にも圈線を入れ、畳付の釉をシャープに剥ぎ取る。3は端反碗である。口縁部は外反しており、内面には葉と果実とみられる文様を描き、外面に圈線を入れる。6は内面に龍を描いた皿である。畠付の釉を剥ぎ取る。4は碗であり、口縁部外面に二重圈線を巡らせてその下に牡丹唐草文を描く。

10は大皿で口縁部内面に青海波文を描く。見込みの文様は山水文とみられる。高台には砂が付着する。8は口縁部が鍔状に屈曲する大皿で、大ぶりの花弁と雄蕊を描く。11は見込みに牡丹唐草文を描いた大皿で、高台には砂が付着する。二次的に火を受けて変色している。5は見込みに十字花を描く碗の高台で、畠付には砂が付着しており、釉は剥ぎ取られていない。高台内は無釉である。

##### b ) 瀬戸美濃焼(図18)

12～27・29～36は瀬戸美濃焼である。小皿・皿・向付・碗・小杯・鉢のほか、杏形を呈する碗・茶入などの茶陶や志野・志野織部・織部などがある。

皿 12～17は灰釉の皿である。12は折縁皿で削り込み高台である。13・14は折縁内禿皿である。13は削り込み高台で、高台には下の器の釉が付着する。14は内面にワトチの痕がある。高台脇と高台内にケズリを施し、高台の断面が低い台形を呈する。15・16は小型の丸皿で、16の内面には灰釉が厚く溜まる。15・16ともに高台内にはワトチの痕がある。17は内禿丸皿である。内面にはワトチ、高台内には重ね焼きの痕がある。

18～20は志野丸皿である。18は高台を貼付けたあとに高台脇と高台内部にケズリを入れ高台断面を三角形に整える。高台内にも釉が掛かり、内面には円錐ピンの痕が認められる。19は削り出し高台で、高台内にも釉がかかる。20は志野丸皿である。内面には口縁と底部に圈線を巡らせ、その間に鉄釉で草花を描く。高台脇と高台内にケズリを入れ高台断面を低い台形に整える。高台内には3箇所にトチの痕が残り、内面にも窯道具の痕跡が認められる。また、高台内には墨で記号を入れる。

向付 31は織部向付である。二次的に火を受けて元の色は失われている。類似する破片から半環足として復元した。見込みに輪違文を描く。33も31と同様に二次的に火を受けている。文様は大きさや形などが31と類似しており、揃いになると考えられる。32は洲浜形に復元される織部向付で半環足である。34は織部向付である。鉄絵で二重の五角形文と丸つなぎ文を描く。36は鼠志野向付である。断



図17 中国製磁器

SD1201(4)、SK2019(11)、SK2204(7・9)、SX2244(8)、SK3017(1～3)、第1c層中(5・6・10)

面部分の観察から、灰色釉を掻き取り、その凹みに白色の長石釉を入れたことがうかがえる。草花を描いたものとみられる。35は36と同じ特徴をもつことから揃いになるとみられる。

**碗** 30は志野織部碗である。内面に同心円文、外面には竹と宝文、山と植物の文様を鉄絵で描いており、その部分が火色を呈する。高台は高く外反する。内面には円錐ピンの痕が3箇所認められる。疊付には織維状のものが付着し、高台内にも釉が施される。26・27は鉄釉を施した天目碗である。25は天目碗の高台で、内面には鉄釉が施される。29は黒織部の沓形を呈する茶碗である。口縁部は肥厚し腰部に2条の沈線が巡る。外面に長石釉が認められるが、文様部分は欠損する。

**小杯・鉢・茶入** 24は志野小杯である。内面全体と外面腰部まで長石釉が掛かる。22は口径28cmの志野鉢である。23は志野向付の底部である。碁笥底のように高台内が浅く窪む。21は鉄釉を施した茶入である。二次的に火を受けているが、内面には有機物が付着する。

### c ) 軟質施釉陶器(図18)

28は軟質施釉陶器の筒形を呈する茶碗である。二次的に火を受けているが、元来、内面は黒色、外

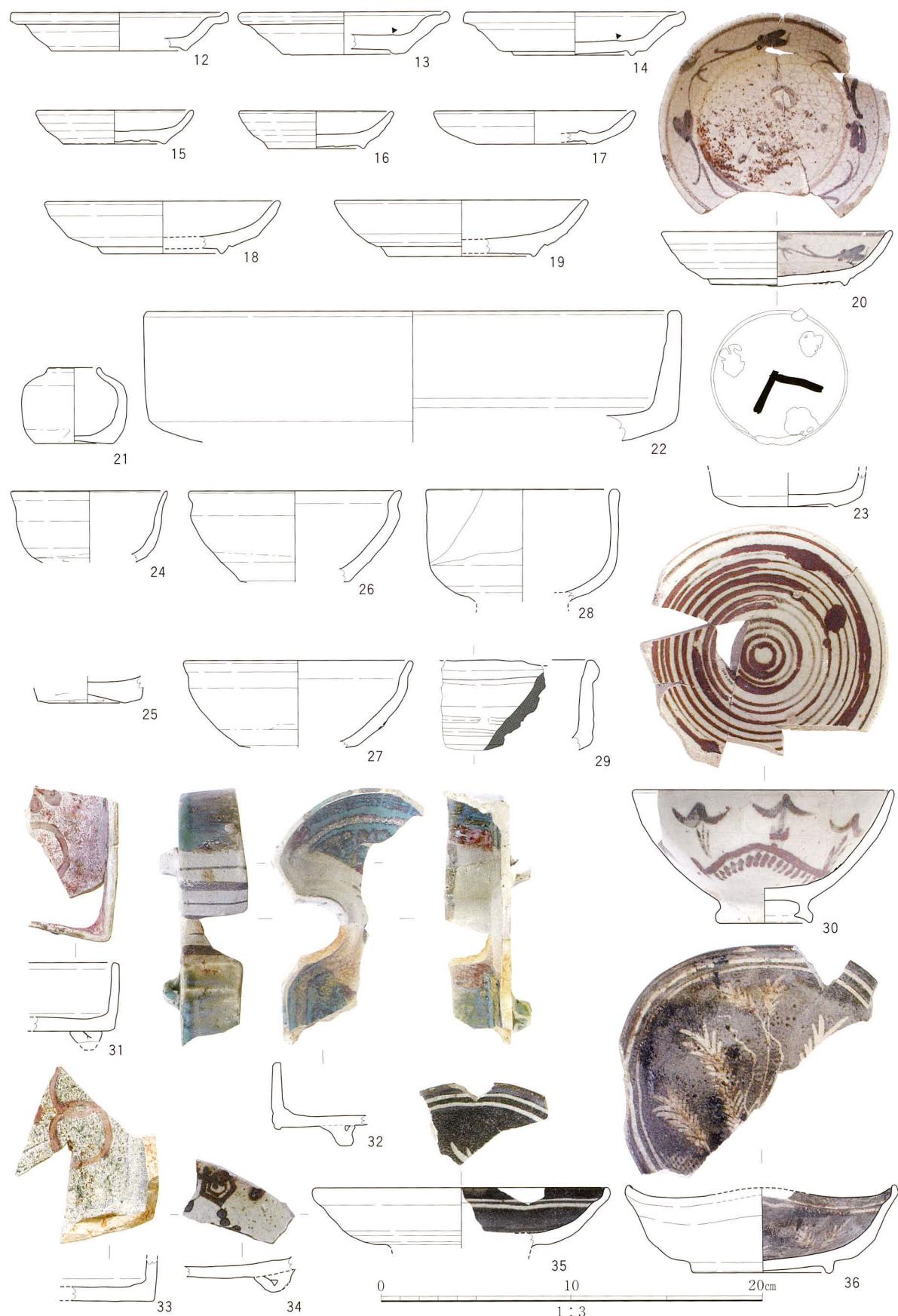


図18 濑戸美濃焼・軟質施釉陶器

SK2001(21)、SP2006(30)、SK2031(29)、SX2032(18・19)、SP2038(24)、SK2069(31・33)、  
SK2069+SP2048(22)、SK2204(12)、SX2244(20)、SK3017(17・23・25・28・35・36)、  
SP5008(13)、SD4028(14)、SD5101(27)、第1c層中(15・16・32・34)、第6層中(26)

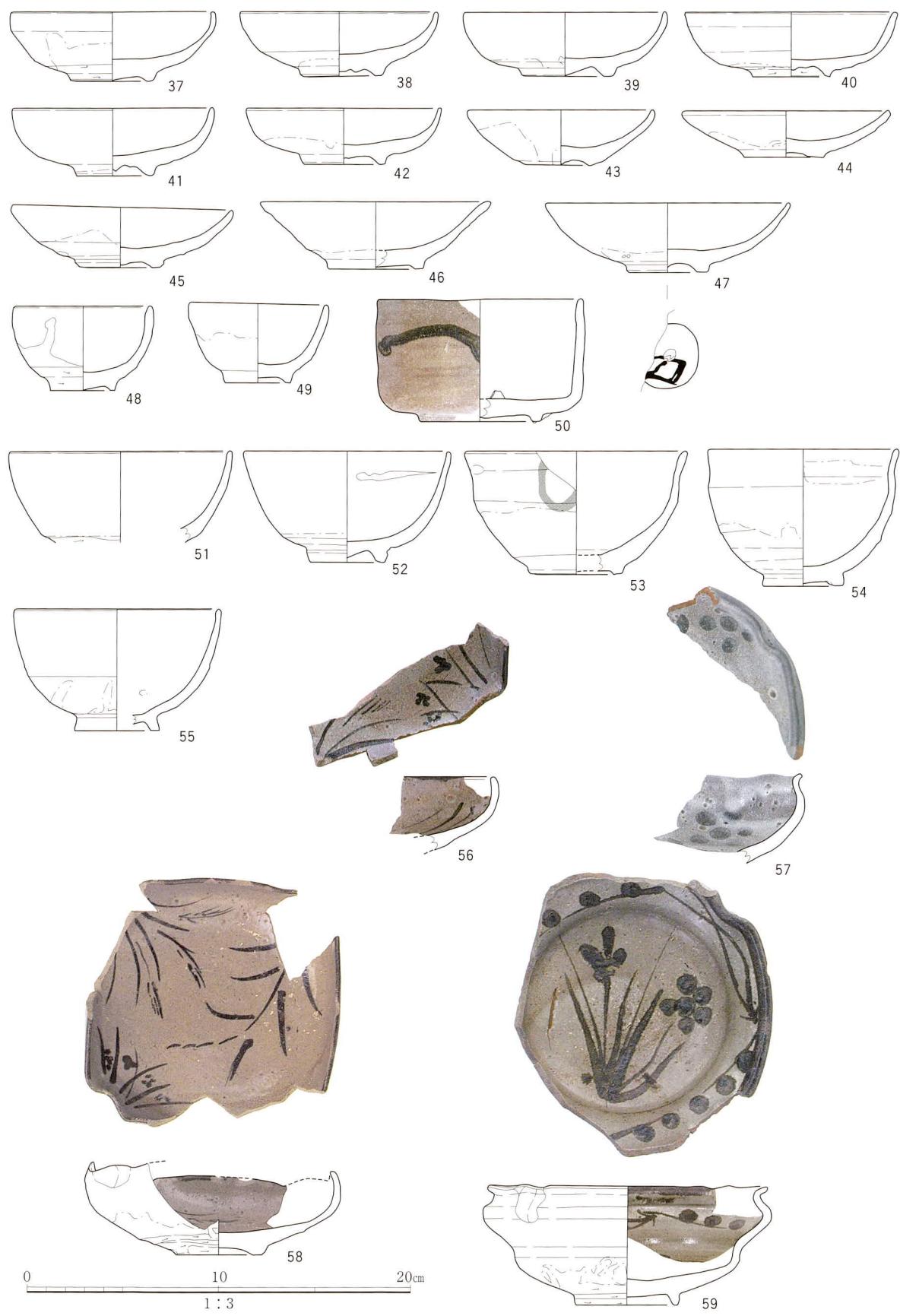


図19 肥前陶器

SP2022(41)、SD2041(46・53)、SK2054(44)、SK2066(42・52)、SK2067(43)、SK2068(50)、SK2069(55)、  
SD2072(49)、SX2244(54)、SK3014(39)、SK3017(37・38・40・48・51・56～59)、第1a層中(45)、第2a層中(47)

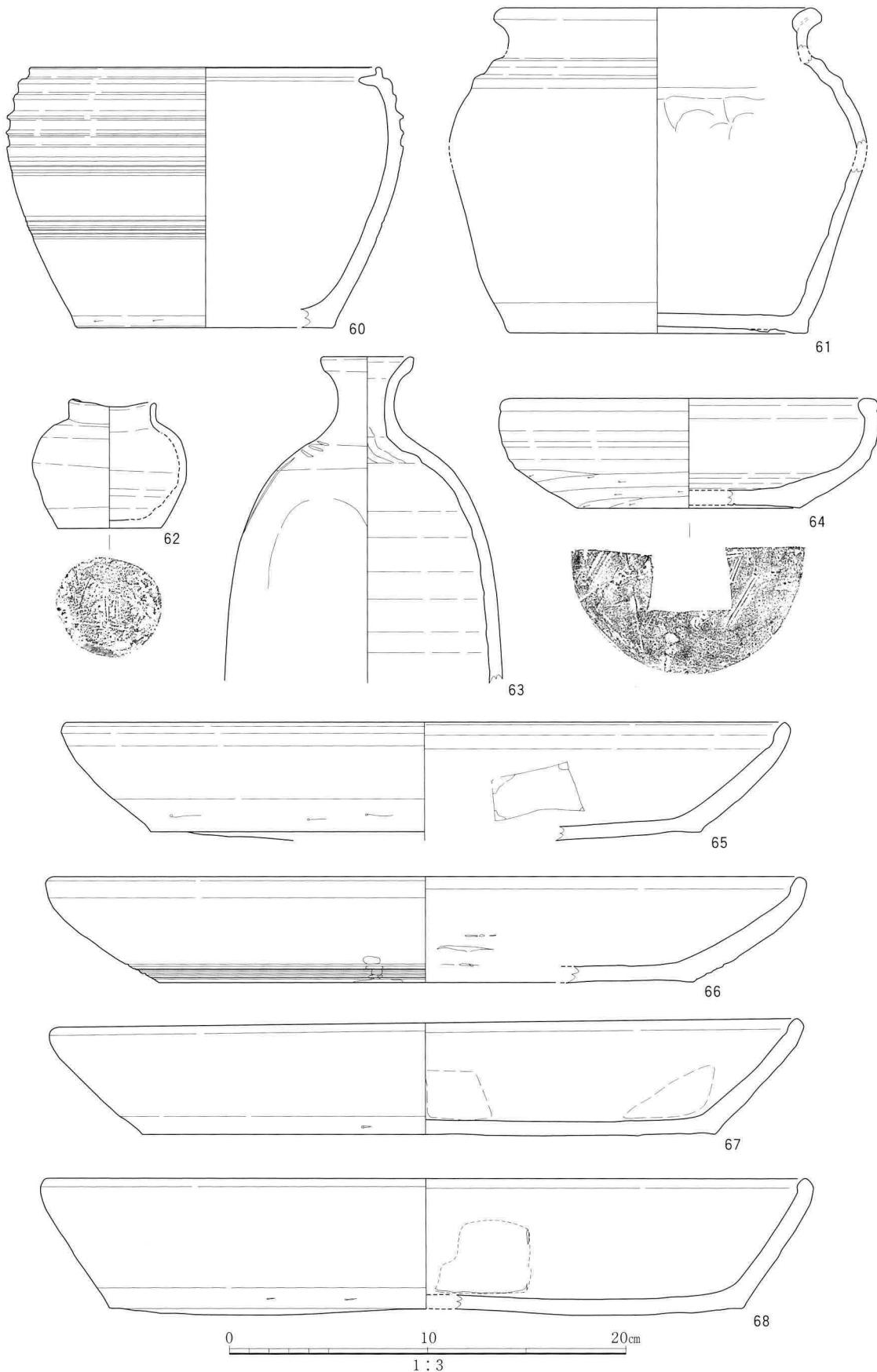


図20 肥前陶器・高取焼・備前焼・丹波焼

SK2069(61)、SK3017(62・63・65・67・68)、SK3017+SK3015(66)、SD5101(64)、第1c層中(60)

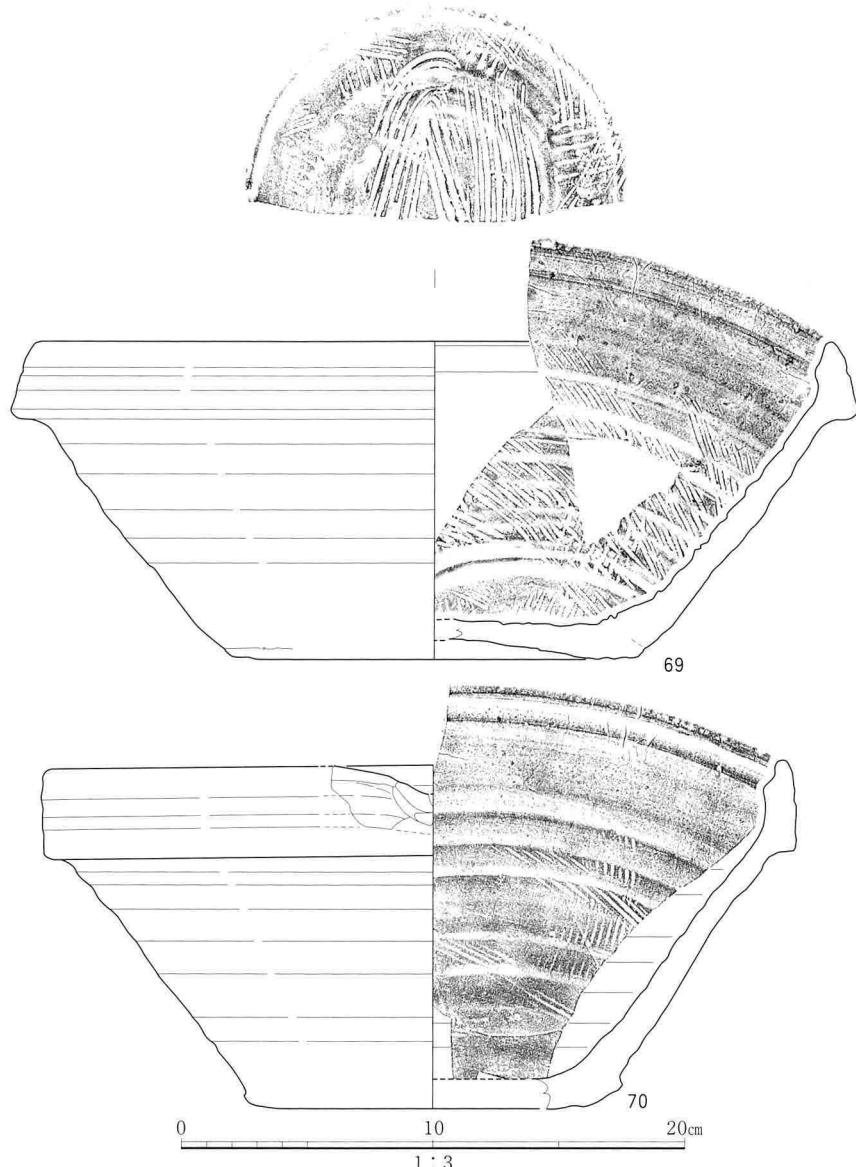


図21 備前焼

SD2095(70)、第6層中(69)

面には緑色の釉が施されていたとみられる。

d) 肥前陶器(図19・20)・高取焼(図20)

皿 37~47は灰釉の皿である。37~40は重ね焼きの痕跡は認められないが、41~47には胎土目が認められる。41は二次的に火を受けている。部分的であるが高台外面まで釉が掛かる。44は4箇所に胎土目が認められる。47は低平な器形が特徴で、口縁端部にナデを施してシャープに整える。高台内には墨書がある。45は二次的に火を受けた灰釉の皿である。4箇所に胎土目が認められる。43は内面に4箇所の胎土目が認められる。高台は外側を削り落としており、断面が三角形を呈する。

小杯 48・49は灰釉小杯である。いずれも高台脇から腰部にかけてケズリで整える。高台内は兜巾状である。49は48よりも高台脇に深いケズリを施して高台を高くする。内面に鉄の小塊が付着する。

碗 50~55は碗である。50は鉄釉で文様を描いた筒形を呈する碗である。51・52・55はいずれも内面と外面腰部にかけて灰釉を施す。52は口縁部内面に釉を掛け残した部分が筋状に残る。55は内面

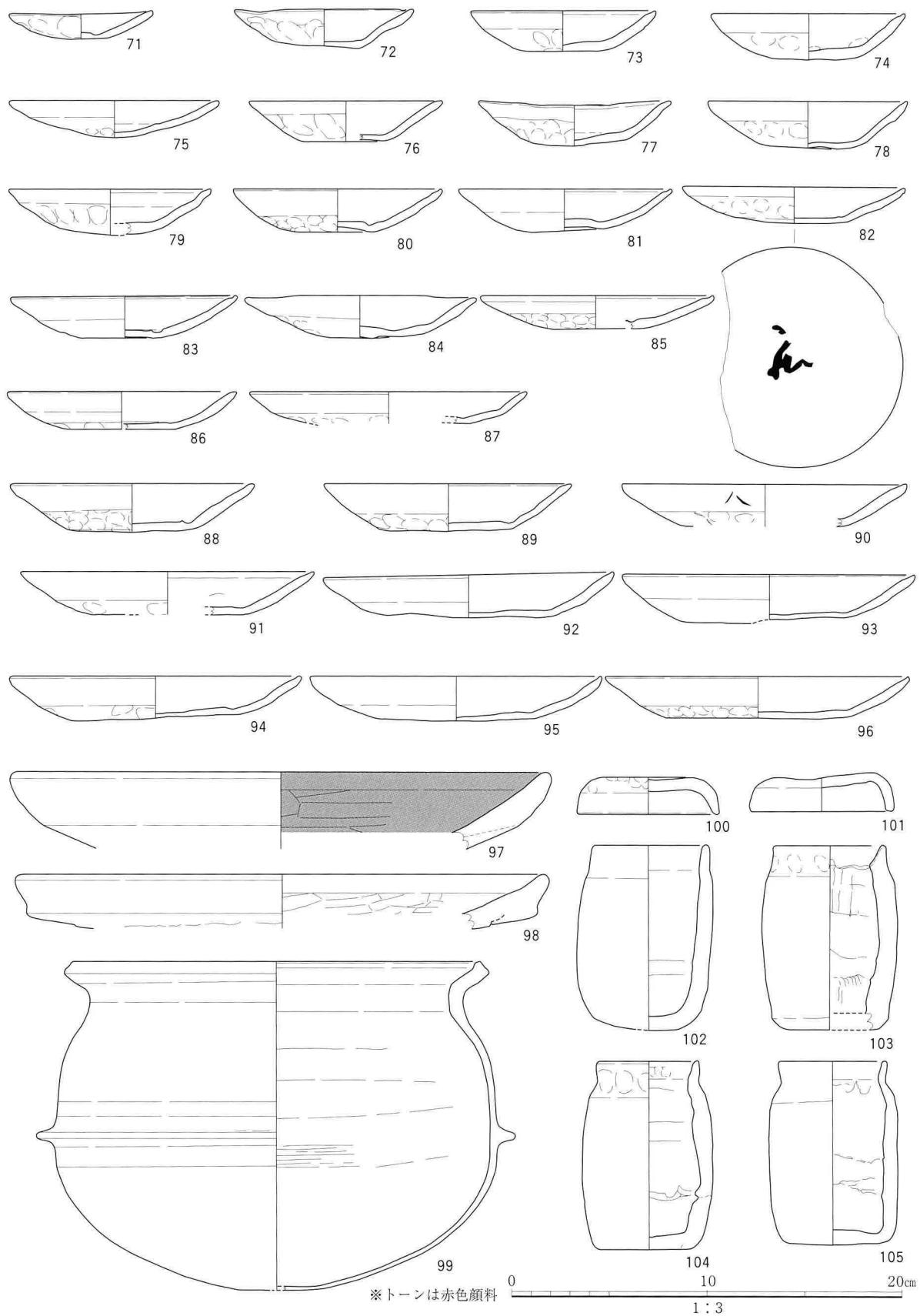


図22 土師器

SK2066(74)、SK2069(91~95)、SK2070(75)、SX2244(73)、SK3014(79)、

SK3017(71・72・76~78・80~90・96・99~105)、SE3019(97・98)

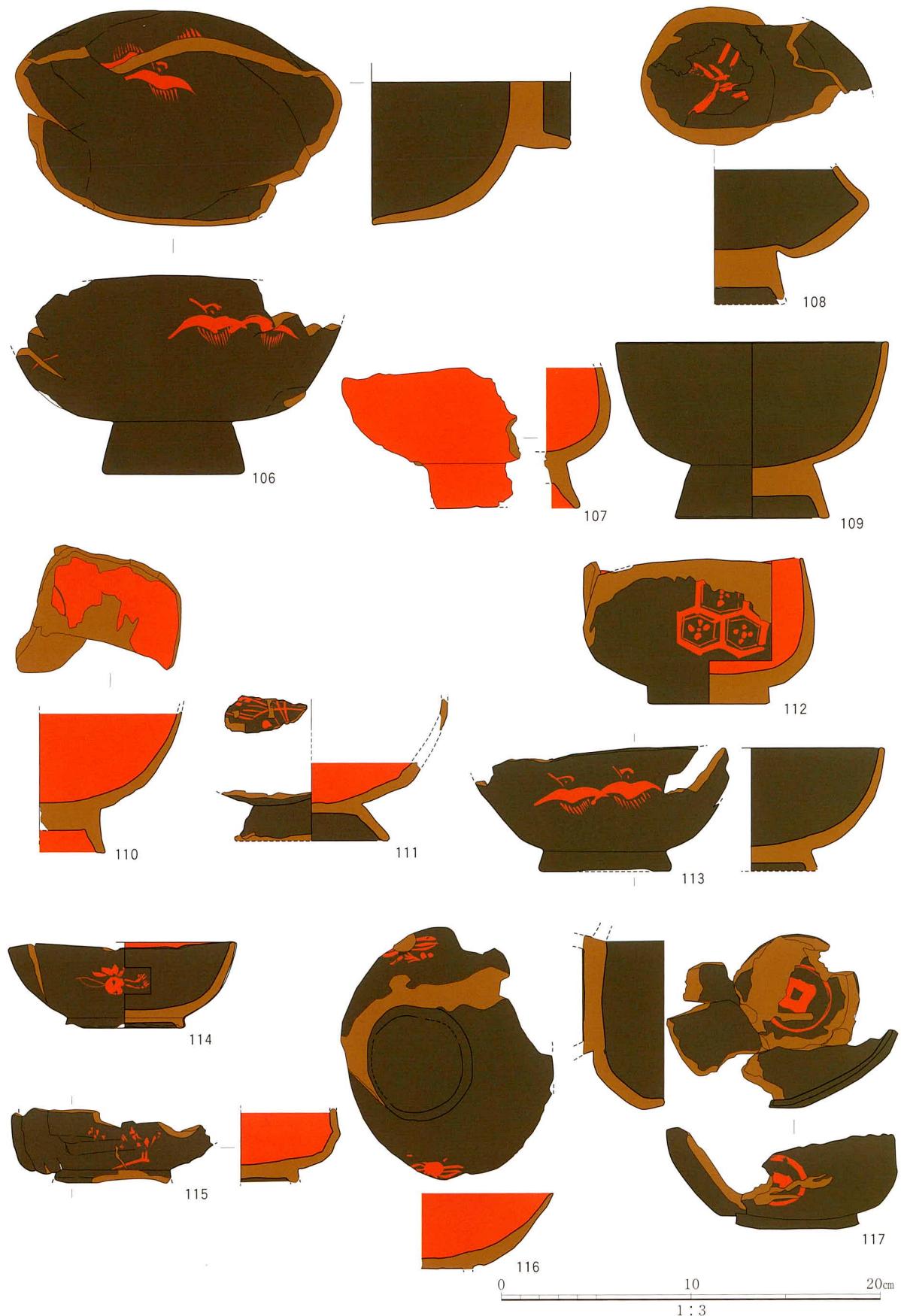


図23 漆器椀

SK3017(106~116)、SD4028(117)

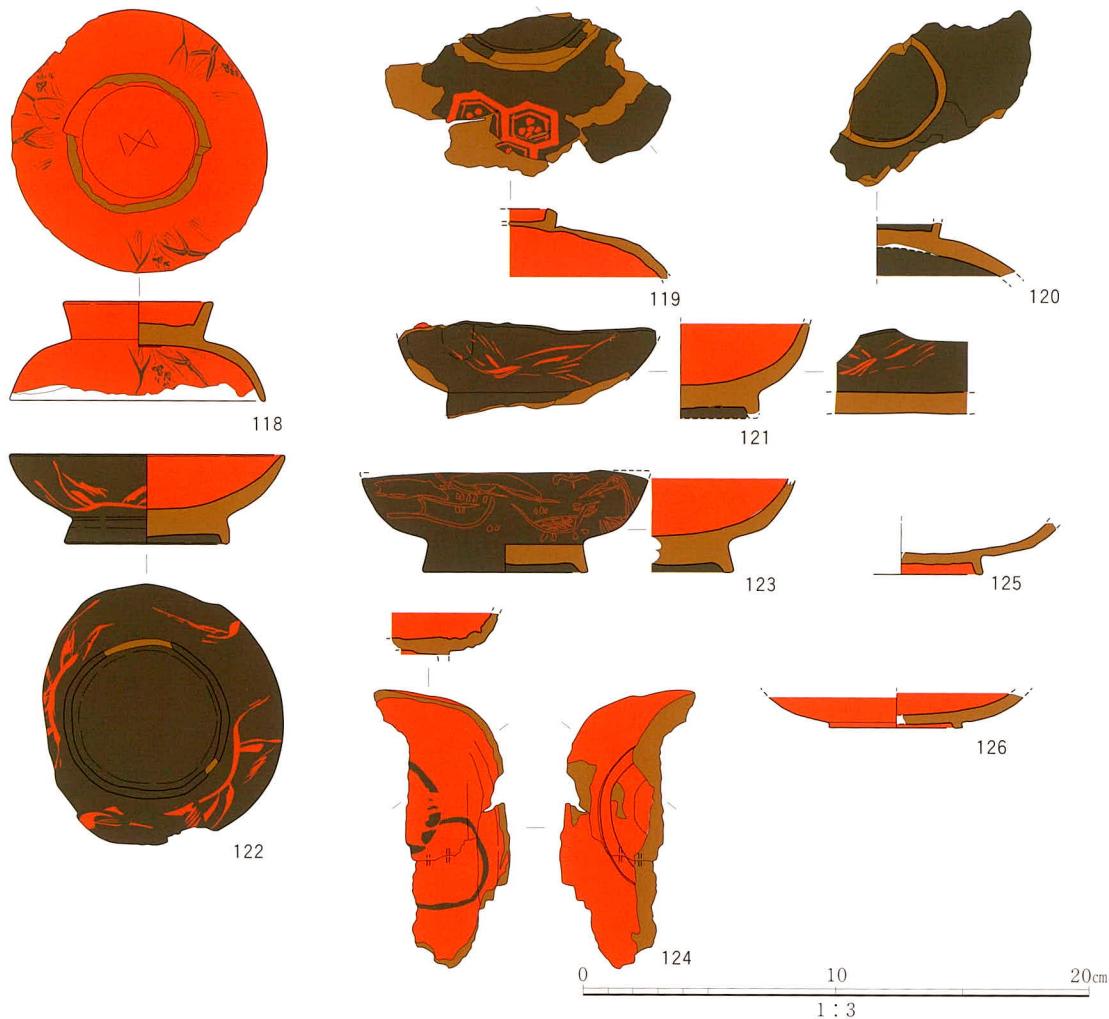


図24 漆器蓋・皿

SK3017(118~126)

に胎土目が認められる。53は外面に鉄釉で文様を描いたのち、内面から腰部にかけて薄い透明釉を施す。54は鉄釉の碗である。腰高の器形で口縁部が短く外反する。52と同様に口縁部内面には釉を掛け残した部分が筋状に残る。

**向付** 56~59は鉄釉で文様を描いた向付である。57は梅文を描き、その上からやや白みを帯びた透明釉を施す。58は内面にアヤメ、ススキなどの四季の草花を描いたのち透明釉を施す。56は文様や形状から58と揃いになるとみられる。59は内面にアヤメを描いたのち透明釉を施す。

**水差・甕** 60は二次的に火を受けているが、釉が施された痕跡があり、肥前陶器の水差とみられる。61は高取焼の甕である。直接接合できない破片が数点認められたが、特徴的な破片であり、出土点数も限られていたため、同一個体として復元した。藁灰釉を全面に施しており、内面には厚い白色の釉溜りが認められる。底部には重ね焼きをした部分以外に植物纖維が付着した痕跡が認められる。重ね焼きの痕跡から2つの製品の上にこの個体が置かれて焼かれたことがうかがえる。

e ) 備前焼(図20・21)

**茶入** 62は内面にロクロ目が顕著であり、底部外面にはヘラ記号が入る。胴部は横断面が正円形であるが頸部以上は橢円形である。

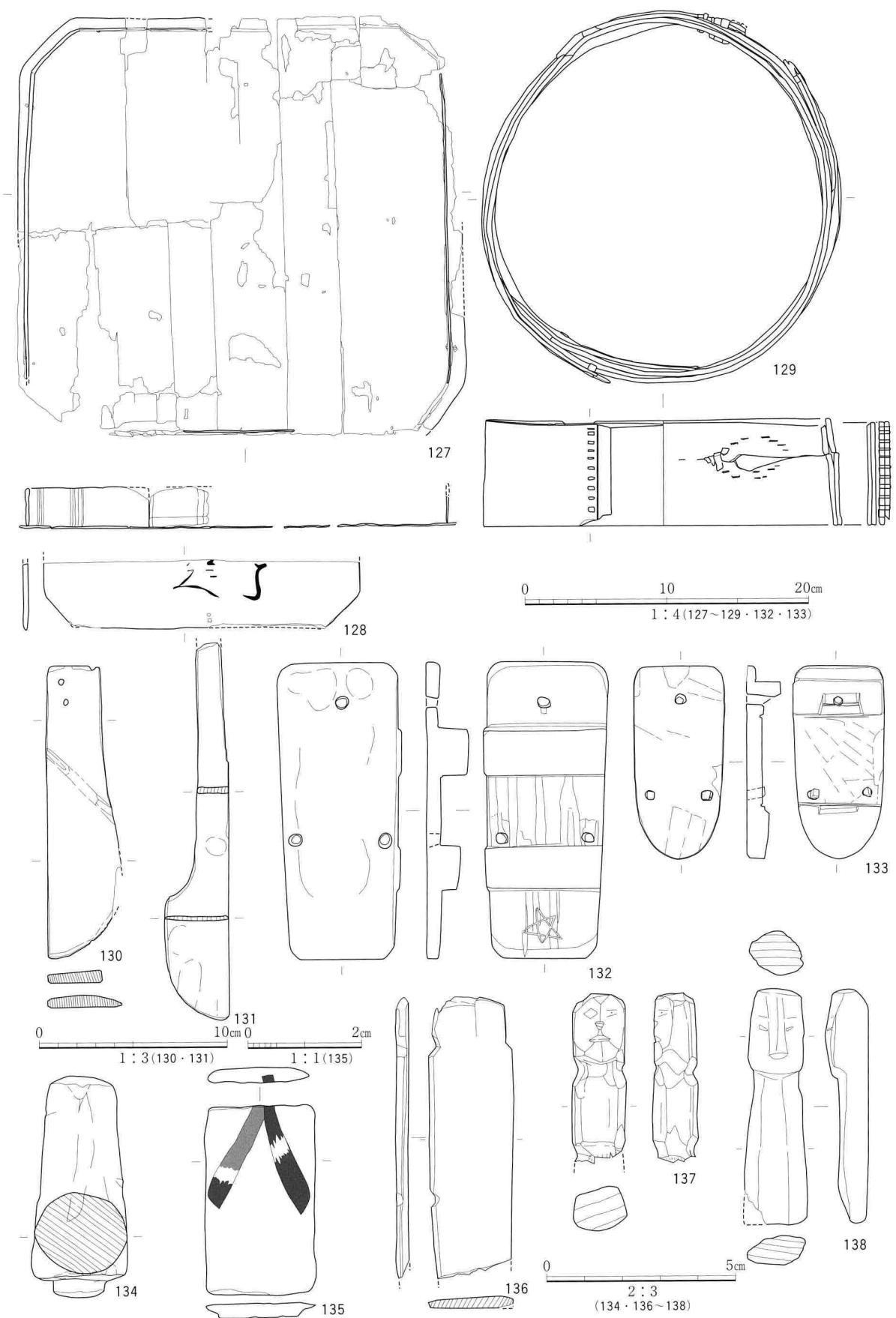


図25 漆器以外の木製品

SK3017(127~132・134~138)、第7a層中(133)

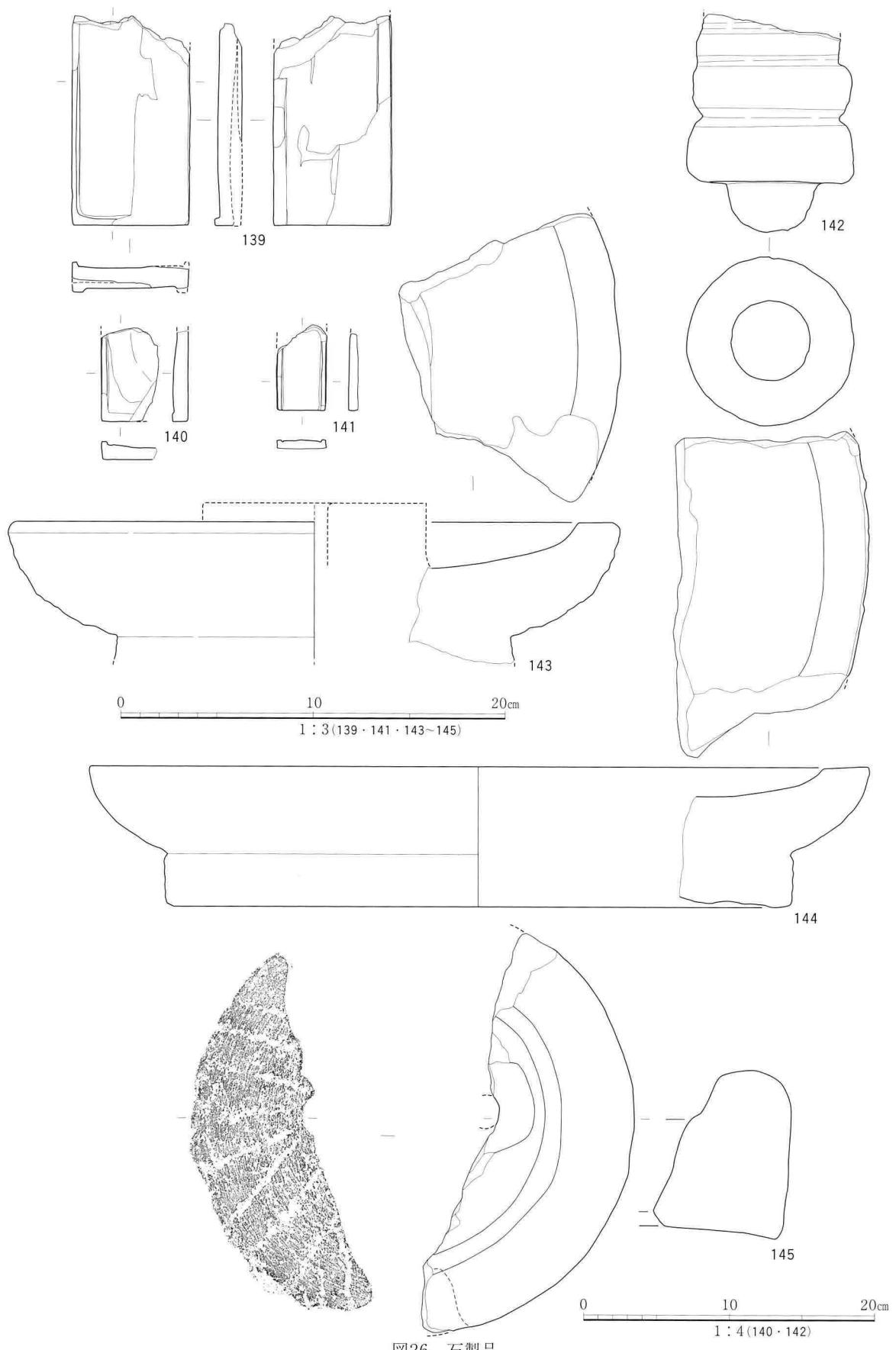


図26 石製品

SE1025(145)、SP1046(143)、SP1232(142)、SD2099(144)、第1a層中(139・141)、第2a層中(140)

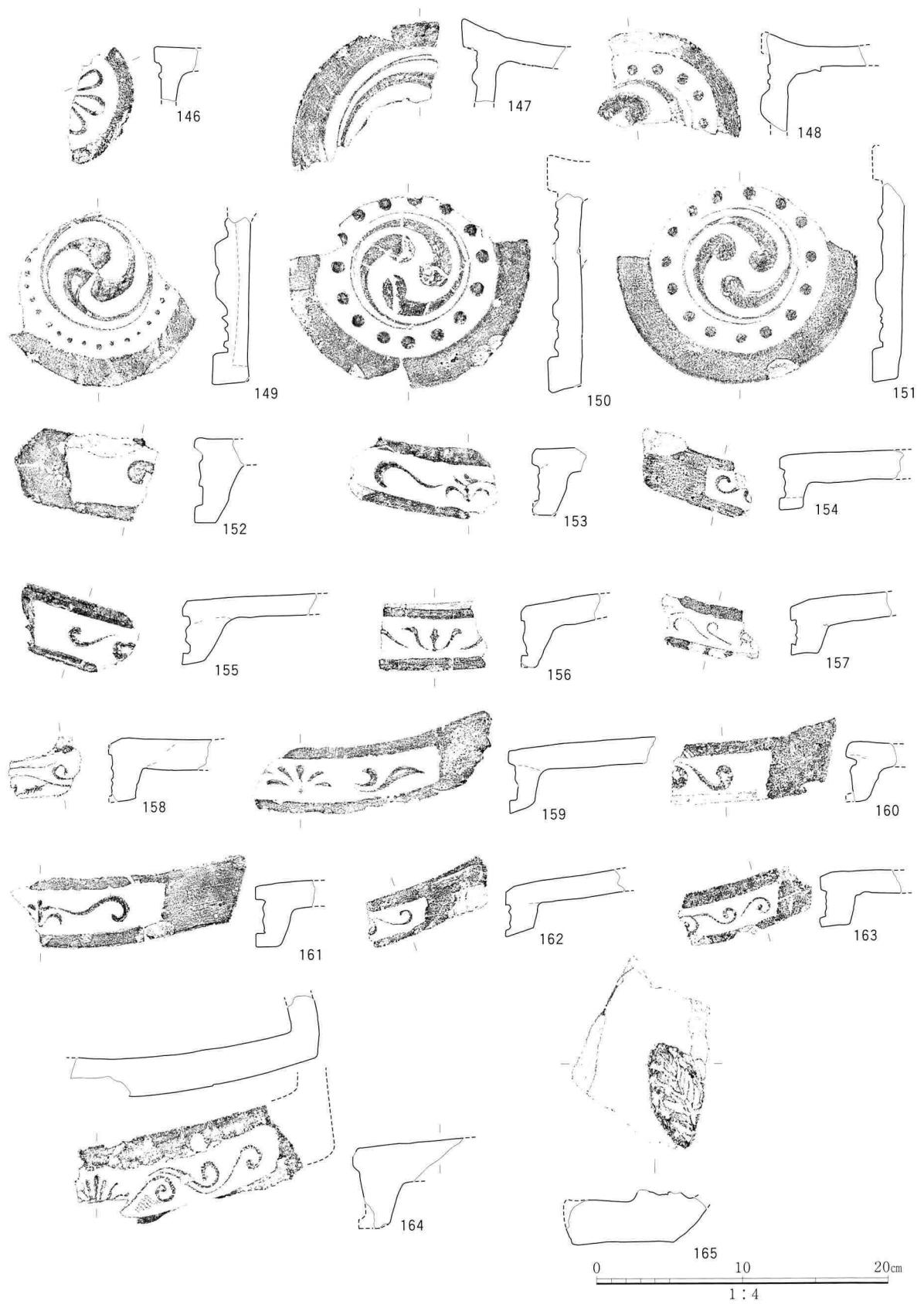


図27 瓦

SP1237(165)、SP2007(159)、SK2031(153・161)、SK2063(147・150)、SK2067(156・158)、SK3017(157)、  
SE3019(164)、SD4028(148)、SP5008(160)、第1a層中(151・155)、第1b層中(146)、第2a層中(152・154)、  
第2b層中(162・163)、第6層中(149)

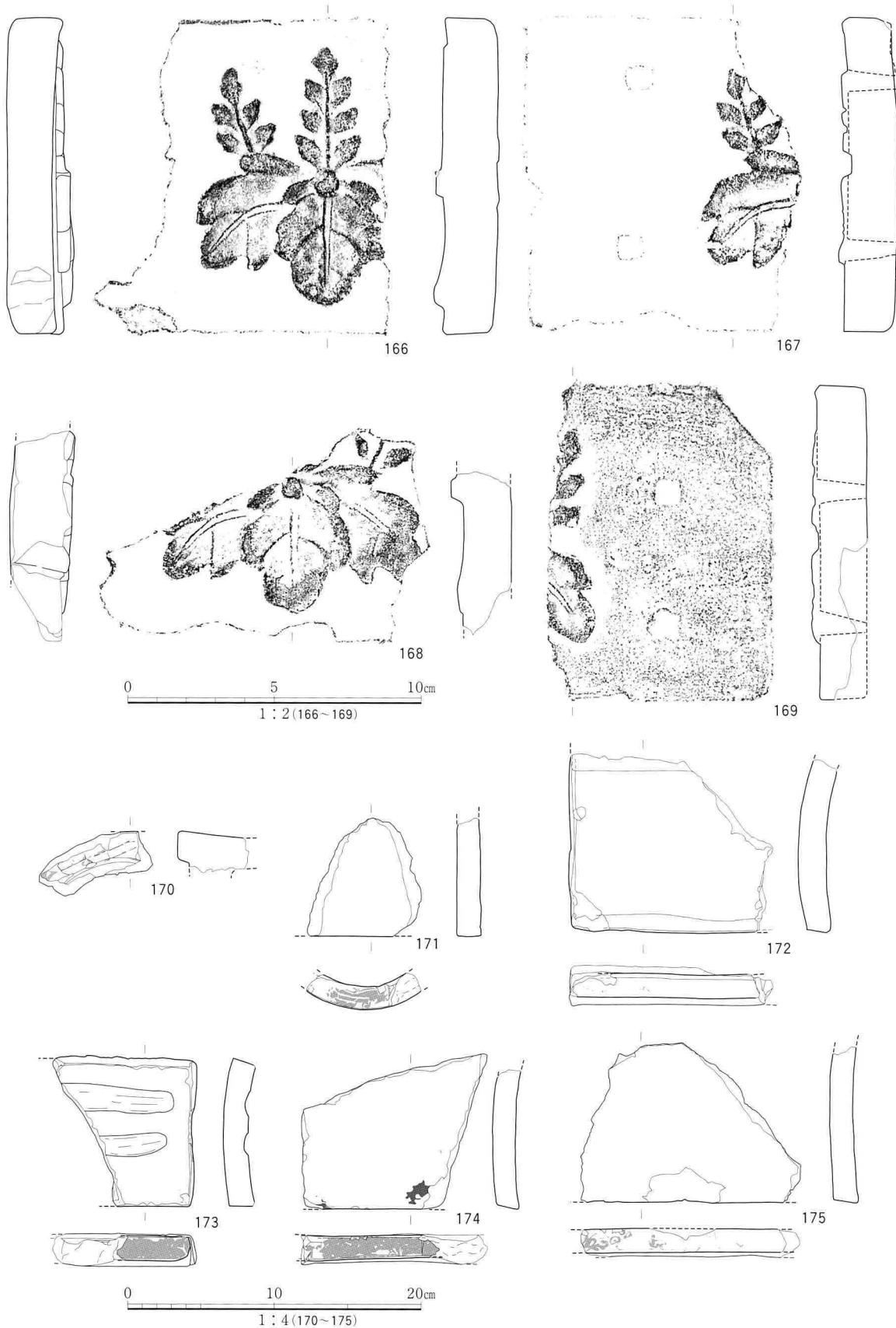


図28 金箔押瓦

SE1025(170)、SK3017(171)、SD5101(167)、第7a層中(173・174)、第7b層中(166)、

第8a層中(168・169・172・175)

徳利 63は肩部に3条のヘラ記号が入り、頸部内面にはシボリ目が残る。

鉢・擂鉢 64は鉢、69・70は擂鉢である。64の底部にはヘラ記号が入る。擂鉢の擂目は69が8条、70が9条で一単位を構成する。

f)丹波焼(図20)

65～68は丹波焼大平鉢である。いずれも直径40cm弱である。内面には重ね焼きの痕が残る。

g)土師器(図22)

皿71～96、大皿97・98、焼塙壺102～105とその蓋100・101、羽釜99がある。95は内面に赤色顔料が付着する。82は底部に、90は口縁部外面にそれぞれ墨書が認められる。

h)漆器(図23・24)

106～109は大型椀である。106・108・109は内外面黒色で、106は見込みと外面に赤色で2羽のオシドリを描く。107は内外面とも赤色である。110～113は中型椀である。110は内面黒色、外面赤色で見込みに文様をもつ。113は内外面とも黒色であり、外側に106と同様の2羽のオシドリを描く。111・112は内面赤色、外面黒色であり、前者には松葉文、後者には三盛亀甲紋を描く。114～117は小型椀である。114～116は内面赤色、外面黒色、117は内外面黒色である。114・116は宝文、115は松葉文を外面に描く。117は見込みと外面に丸に釘抜き紋を入れる。118～120は蓋である。118は内外面とも赤色で外面には沢瀉文を描く。また高台内に独楽の形を線刻する。119は内面赤色、外面黒色で、112と同様、三盛亀甲紋を入れており、112の蓋とみられる。120は内外面とも黒色である。121～126は皿である。高台内面の器壁が122・123は厚いが、124～126は薄く、高台も低い。122・123は内面赤色、外面黒色で前者には樹木文、後者には鶴亀松文を入れる。124・126は内外面赤色で124は内面に輪違い紋を入れる。125は外面に赤色の漆が残るが、内面は剥離しており不明である。

i)漆器以外の木製品(図25)

127・128は折敷である。127は一辺31.6cm、高さ2.8cmである。側板の四隅内面には切り曲げのための切込みが認められる。128は一辺が22.4cmの折敷底板で墨書が見られる。側板を固定するための2個一対の孔がある。129は曲物側板である。孔が開いており、樹皮を用いて補修をする。底板を留めるための孔が見られない。130・131はヘラである。130の側面には刃部から柄部にかけて溝状に浅く凹んでおり、紐をかけた痕とみられる。また、柄部には2個所に木釘の痕が認められる。131は基本的に片刃であるが先端のみ両刃である。132・133は一本作りの下駄である。132は左足用で、長さ21.0cm、幅8.5cmである。裏面に五芒星を刻む。133は長さ13.7cmと小型で、緒孔には鼻緒を留めるための材が残る。134は栓である。長さ3.7cm、直径1.7cmで、基部には直径0.9cmの円形で、高さ0.4cmの突起がある。135は長さ3.4cm、幅1.9cmの長方形の板で、山形を墨で書き入れる。136は頭部側方に2個所の抉りを入れており、荷札木簡とみられる。文字が見られるが判読できなかった。137・138は人形である。137は長さ4.5cmで、両側を落としてできた稜に鼻、口を刻む。目の部分は墨で描く。138は長さ6.3cmで両側を抉り中央の稜を鼻とする。口と鼻、眉は刻みで表現する。

i)石製品(図26)

139～141は硯である。139は表裏を使用する。140は幅3.5cmの小型品である。141は140よりさら

に小型品で幅2.5cmである。142は宝篋印塔相輪の九輪部分下部に当る。143～145は石臼である。145は上臼で擂目を放射状に入れる。144は下臼である。143は直径40cmに復元される茶臼の下臼である。

#### k) 瓦・金箔押瓦(図27・28)

146は菊丸、147～151は軒丸瓦、152～163は軒平瓦、164は滑留め付き軒平瓦、165は鬼瓦である。147は巴文の断面が角張っており、珠文をもたない。148はイブシ焼せず、瓦当と丸瓦部は丸瓦部にカキヤブリを施して接合する。丸瓦部凹面にはコビキBが見られる。149は珠文数が多く32個に復元される。150は直径16.4cmで珠文数は15個である。151は直径16.2cm、珠文数15個であり150と類似するが、巴文の尾が一個所で接しており150と異なる。軒平瓦は全て中心飾りの側方に唐草文を配するものである。中心飾りは多様で、萼をもつ一点珠三葉153・161、三葉156、宝珠157がある。153・161の唐草は第1支葉のみである。また、158・164は姫路城や播州八正寺で見られるものと同じ文様で、唐草の間に葉の表現が認められる[黒田慶一1996]。165は桃文の鬼瓦で、葉の部分である。

166～175は金箔押瓦で、166～169は桐紋飾瓦である。166～168は大きさや文様もよく似ており、いずれも五七桐紋とみられる。葉脈を2条の凸線で表現し、一辺9mmの方形の釘穴を設けている点が特徴である。170は軒丸瓦で外縁に金箔が残る。172～175は熨斗瓦、171は輪違いで、いずれも側面に金箔が残る。

## 5. 自然科学分析

### 5-1. 哺乳類・鳥類の骨の分析

安部みき子(大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学)

#### a) はじめに

豊臣後期の遺構から約110点の鳥類と哺乳類の動物遺存体が出土し、哺乳類は属または種まで、鳥類に関しては科まで同定できた。これらの結果を遺構ごとにまとめて報告する(表8、写真38)。

#### b) SK3017出土の動物骨

哺乳類は1属3種、鳥類は3科までの同定が可能であった。哺乳類の内、出土数の最も多かったのがクマネズミ属で総数24点、最小個体数は4個体であった。出土部位はほぼ全身におよび、比較的保存状態の良い頭骨も出土している。また、上腕骨や脛骨などの長骨は骨端が未癒合な若い個体も含まれていた。シカは上肢骨のみ5点見られ、最小個体数は2個体であった。ウマは橈骨1点のみであった。イヌは長骨の骨端が未癒合の長骨4点が出土しており、これらは同一の個体と思われる。

鳥類はニワトリと思われるキジ科のものが6点出土し、そのうちの5点は骨化が進んでいない長骨でありこれらは非常に若いと推測される。残りの1点は蹴爪を有した足根中足骨であり、オスの成鳥であった。最小個体数は幼鳥が2個体、成鳥が3個体となる。カモ科は5点出土しており、大型の上腕骨が1点と、中型でオナガガモと同大のもの2点とオナガガモよりやや小型のもの1点が見られ、最小個体数は3個体となる。サギ科はチュウサギよりやや大きい足根中足骨が同定された。

#### c) 第2b～3層出土の動物骨

鳥類のみが出土し、キジ科2点、カモ科が1点とサギ科が1点同定できた。キジ科はニワトリと思われ、いずれも骨化が進んでいないため幼鳥と推察され、最小個体数は1個体である。カモ科は切断された痕跡が見られる頸椎が出土しており、調理方法などを知る手掛りとなる。サギ科はコサギの大きさと思われる寛骨が遺存していた。

#### d) 第2b層出土の動物骨

同一個体であるシカの骨盤部がまとまって出土している。左右の寛骨は腸骨稜や坐骨結節、恥骨結合部の骨化が未完成であり、仙骨の横線も骨化が完了していないため、若い個体と考えられる。しかし、奈良公園の成体のメスと比較すると大きいため、亜成体または若いオスと推測される。

#### e) SK2070出土の動物骨

ウマのみが出土した遺構である。出土部位は下顎や歯が多かったが、橈骨や大腿骨などの長骨も混在していた。これらは保存状態が悪く、個体の同定や骨計測ができたものはわずかであった。最小個体数は3個体であるが、資料番号488-03の上顎臼歯は磨耗が特に進んでおり老齢個体と思われ、これを計算に入れると4個体である。

#### f) まとめ

- 1、豊臣期の大坂城の遺構からは大型のイエネズミが多数出土しており[安部みき子2002]、SK3017にネズミが多いことも当時のネズミの生息状況を裏付けている。
- 2、食用にされたと思われるニワトリは幼鳥のものが多かった。
- 3、カモ科は3種類の大きさが異なるものが見られ頸椎の切断痕からこれらも食されたと考えられる。
- 4、シカの骨盤部のみが出土したものは、若いオスであった。
- 5、ウマのみが出土した土壙SK2070では歯以外の骨の保存状態は悪かった。最小個体数は4個体で、年齢は若い個体から老齢個体まで幅が広かった。

表2 シカの椎骨の計測値

資料番号	000-001	000-002
部位	第5腰椎	仙骨
椎骨	最大長	118.26
	最大幅	90.02+
	高径	67.99
椎体長	34.72	111.43
前椎体面	高径	23.58
	横径	34.84
後椎体面	高径	17.85
	横径	41.30
前関節突起間幅	47.87	45.90
後関節突起間幅	44.15	—
肋骨突起間幅	123.51	—
前後関節突起間長	53.65	—

表3 シカの肩甲骨の計測値

資料番号	555-046	
関節窩	最大長	42.74
	全長	32.64
	幅	30.19
肩甲頸	最小長	23.86
	厚	16.32

表4 シカの長骨の計測値

資料番号	555-044	555-045	555-001
部位	上腕骨	橈骨	中手骨
最大長	—	214.82	204.36
全長	—	207.93	—
全長(骨頭から)	181.77	—	—
近位端	矢状径	21.74	20.77
	横径	36.07	38.23
骨幹中央	矢状径	25.74	14.24
	横径	19.20	24.13
遠位端	矢状径	40.06	25.24
	横径	45.58	35.14
	関節面幅	55.20	—

表5 シカの寛骨の計測値

資料番号	000-004	000-005
全長	260.94	264.74
寛骨臼	長径	40.90
	高径	36.50
恥骨結合面長	—	84.18
閉鎖孔	最大長	53.78
	高径	32.18
腸骨頸部	高径	22.32
	厚	12.29
	—	12.47

表6 ネズミの下顎骨の計測値

資料番号	555-048	555-025	555-026	555-027
下顎骨全長(id-goc.)	26.84	—	25.49	—
下顎骨全長(id-com.)	27.86	24.85	27.79	30.10

表7 ウマの下顎骨の計測値

資料番号	480	478
左右	左	右
頬白歯歯槽列長	—	—
前臼歯列長	91.04	—
後臼歯列長	—	—
下顎体高(M1の前線)	67.45	61.24
第2前臼歯	頬舌径	12.52
	近遠心径	—
第3前臼歯	頬舌径	14.35
	近遠心径	26.13
第4前臼歯	頬舌径	14.39
	近遠心径	25.94
第1後臼歯	頬舌径	13.75
	近遠心径	24.65
第2後臼歯	頬舌径	13.23
	近遠心径	24.79
第3後臼歯	頬舌径	—
	近遠心径	—

\*表2～7の計測値単位はmm。

表8-1 動物骨鑑定表

資料整理 番号	報告書遺構 番号	種名	出土部位		詳細	計測値 (mm)	備考
			左右	部位			
413-001	SK2070	ウマ	左	大腿骨	第3転子から約20cm遺存		
413-002	SK2070	ウマ	右	桡骨	近位端から約28cm遺存、近位端軽度の破損		
413-003	SK2070	ウマ?		長骨片	多數		
413-004	SK2070	ウマ	不明	犬歯	上下左右不明		
413-005	SK2070	ウマ	左	下顎第3切歎	歯冠破損		
413-006	SK2070	ウマ	左	下顎第2切歎	歯冠破損		
413-007	SK2070	ウマ	左	下顎第1切歎	歯冠破損		
413-008	SK2070	ウマ	右	下顎第1切歎	歯冠破損		
413-009	SK2070	ウマ	右	下顎第2切歎	歯槽の一部遺存、歯冠破損		
413-010	SK2070	ウマ	左	上顎第3切歎	歯冠破損		
413-011	SK2070	ウマ	左	上顎第2切歎	歯冠破損		
413-012	SK2070	ウマ	右	上顎第1切歎	歯冠破損		
413-013	SK2070	ウマ	右	上顎第2切歎	歯冠破損		
413-014	SK2070	ウマ	右	上顎第3切歎	歯冠破損		
413-015	SK2070	ウマ	右	上顎第2切歎or第1臼歎		頬舌径 24.90 近遠心径 26.66	
413-016	SK2070	大型哺乳類(ウマ?)	不明	寛骨	寛骨白の一部のみ遺存		
413-017	SK2070	大型哺乳類(ウマ?)		骨片	多數		焼骨一部混入
414	SK2070	ウマ	不明	切歎	歯冠の保存悪い		
478	SK2070	ウマ	左右	下顎骨	切歎の歯槽部破損、右下顎枝破損、P2~M3まで釘植、左は第3大臼歎槽より後方が破損、P2~M2まで釘植、M3は遊離	表 7	
480	SK2070	ウマ	左右	下顎骨	左はP2~M2まで釘植、右はP3~M2まで釘植、両側ともM2以降は破損、右M3は遊離	表 7	
481	SK2070	ウマ	左	橈骨	尺骨との融合部から遠位約15cm遺存		
485	SK2070	大型哺乳類	不明	長骨片	関節部多數遺存		焼骨
486-001	SK2070	ウマ	右	大腿骨	第3転子のみ遺存		
486-002	SK2070	大型哺乳類(ウマ?)		長骨片			
488-001	SK2070	ウマ	不明	基節骨	近位部破損、保存状態悪い		
488-002	SK2070	ウマ?		頭骨片など	12点		焼骨混入
488-003	SK2070	ウマ	左	上顎第1後臼歎	遊離歯	頬舌径 25.75 近遠心径 22.15	489-009~011と同一個体
488-004	SK2070	ウマ	左	上顎第2後臼歎	遊離歯	頬舌径 25.90 近遠心径 22.22	489-009~011と同一個体
488-005	SK2070	ウマ	左	上顎第3後臼歎	遊離歯	頬舌径 25.52 近遠心径 26.67	489-009~011と同一個体
488-006	SK2070	ウマ	右	上顎第3後臼歎	遊離歯	頬舌径 19.50 近遠心径 28.02	488-006~008は同一個体
488-007	SK2070	ウマ	右	上顎第2後臼歎	遊離歯	頬舌径 23.35 近遠心径 25.64	488-006~008は同一個体
488-008	SK2070	ウマ	右	上顎第1後臼歎	遊離歯	頬舌径 22.63 近遠心径 24.20	488-006~008は同一個体
488-009	SK2070	ウマ	右	上顎第3前臼歎	遊離歯	頬舌径 22.97 近遠心径 27.01	488-009と010は同一個体、比較的老齢
488-010	SK2070	ウマ	右	上顎第2後臼歎	遊離歯	頬舌径 25.53 近遠心径 22.13	488-009と010は同一個体、比較的老齢
488-011	SK2070	ウマ	右	上顎臼歎	遊離歯	頬舌径 27.23 近遠心径 25.89	
488-012	SK2070	ウマ	右	上顎臼歎	遊離歯	頬舌径 23.40 近遠心径 23.62	
488-013	SK2070	ウマ	右	上顎臼歎	遊離歯	頬舌径 26.78 近遠心径 21.95	老齢
489-001	SK2070	ウマ	左	上顎第2前臼歎	遊離歯	頬舌径 22.22 近遠心径 36.19	489-001~006までと同一個体
489-002	SK2070	ウマ	左	上顎第3前臼歎	遊離歯	頬舌径 23.22 近遠心径 24.31	489-001~006までと同一個体
489-003	SK2070	ウマ	左	上顎第4前臼歎	遊離歯	頬舌径 22.93 近遠心径 24.18	489-001~006までと同一個体
489-004	SK2070	ウマ	左	上顎第1後臼歎	遊離歯	頬舌径 24.21 近遠心径 26.03	489-001~006までと同一個体
489-005	SK2070	ウマ	左	上顎第2後臼歎	遊離歯	頬舌径 23.99 近遠心径 26.66	489-001~006までと同一個体
489-006	SK2070	ウマ	左	上顎第3後臼歎	遊離歯	頬舌径 21.00 近遠心径 26.51	489-001~006までと同一個体
489-007	SK2070	ウマ		切歎	上下左右不明 左右のI1とI2,I3が釘植		
489-008	SK2070	ウマ	左	下顎第3後臼歎	遊離歯	頬舌径 12.04 近遠心径 30.05	若い
489-009	SK2070	ウマ	左	上顎第2前臼歎	遊離歯	頬舌径 23.47 近遠心径 36.17	488-003~005までと同一個体、比較的若い
489-010	SK2070	ウマ	左	上顎第3前臼歎	遊離歯	頬舌径 25.78 近遠心径 27.12	488-003~005までと同一個体、比較的若い
489-011	SK2070	ウマ	左	上顎第4前臼歎	遊離歯	頬舌径 27.62 近遠心径 26.16	488-003~005までと同一個体、比較的若い
489-012	SK2070	ウマ	右	上顎第3前臼歎?	遊離歯	頬舌径 26.73 近遠心径 27.32	
000-001	第2b層中	シカ	一	第5腰椎		表 2	000は全て同一個体
000-002	第2b層中	シカ	一	仙骨	右耳状面わざかに破損	表 2	横線の骨化は完了していないので若い、000は全て同一個体
000-003	第2b層中	シカ	一	第1尾椎		最大長 32.76,推体長 25.04	000は全て同一個体
000-004	第2b層中	シカ	左	寛骨	腸骨稜、坐骨結節、恥骨結合部はいずれも未骨化	表 5	若い、000は全て同一個体
000-005	第2b層中	シカ	右	寛骨	腸骨稜、坐骨結節、恥骨結合部はいずれも未骨化	表 5	若い、000は全て同一個体
530-001	SK3017	カモ科(大型)	右	上腕骨	骨幹中央から遠位端まで約10cm遺存	遠位端矢状径 13.15,横径 20.91	
530-002	SK3017	カモ科(中型)	左	鳥口骨	胸骨閔節面外側部破損		
555-001	SK3017	シカ	右	中手骨		表 4	
555-002	SK3017	シカ	右	上腕骨	骨幹中央から遠位端まで遺存、内側・外側上顎とともに破損	遠位端閔節面幅 36.76	
555-003	SK3017	ウマ	右	桡骨	骨幹中央約20cm遺存	骨幹中央矢状径 24.00,横径 35.37	
555-004	SK3017	イヌ	右	大腿骨	両骨端未癒合	骨幹最大長 128.70,骨幹中央矢状径 20.40,横径 11.76	幼体、555-4~7まで同一個体?
555-005	SK3017	イヌ	右	脛骨	両骨端未癒合	骨幹最大長 124.72,骨幹中央矢状径 11.00,横径 12.01	幼体、555-4~7まで同一個体?
555-006	SK3017	イヌ	右	第3中足骨		近位+骨幹最大長 52.12	幼体、555-4~7まで同一個体?
555-007	SK3017	イヌ	右	第5中足骨		近位+骨幹最大長 48.34	幼体、555-4~7まで同一個体?
555-008	SK3017	イヌ?		舌骨			
555-009	SK3017	ドブネズミ	一	頭骨	頭頂骨より前部が遺存	硬口蓋長(P-st) 25.89	歯の磨耗が大きい
555-010	SK3017	ドブクマネズミ	左	大腿骨		最大長 35.67	
555-011	SK3017	ドブクマネズミ	左	仙骨	第1仙椎と第2仙椎のみ癒合して遺存	最大幅 13.86	
555-012	SK3017	カモ科(中型)	右	上腕骨		最大長 97.50	オナガガモとほぼ同大
555-013	SK3017	カモ科(中型)	左	手根中手骨	近位端わざかに破損	全長 50.97+	オナガガモより小
555-014	SK3017	カモ科(中型)	左	尺骨		近位端矢状径 12.74,横径 10.52	オナガガモとほぼ同大
555-015	SK3017	サギ科(中型)	右	足根中足骨	骨幹部より遠位端まで約6cm遺存	遠位端矢状径 5.78,横径 9.48	チュウサギよりやや大きい
555-016	SK3017	ニワトリ?	右	上腕骨	骨幹約5cm遺存		
555-017	SK3017	ニワトリ?	左	大腿骨	両骨端未骨化	全長 48.70	幼体、555-17~19は同一個体?
555-018	SK3017	ニワトリ?	左	上腕骨	両骨端未骨化	全長 45.42	幼体、555-17~19は同一個体?
555-019	SK3017	ニワトリ?	右	脛骨	両骨端未骨化	全長 50.36	幼体、555-17~19は同一個体?
555-020	SK3017	ニワトリ?	右	脛骨	両骨端未骨化	全長 64.23	幼体
555-021	SK3017	イヌ?	不明	腓骨	骨幹から遠位部約5cm遺存、遠位端未癒合		
555-022	SK3017	大型哺乳類	骨片		1		
555-023	SK3017	ニワトリ?	左	足根中足骨	蹠爪あり	全長 71.55	♂
555-024	SK3017	トリ(大型)	左	尺骨	骨幹中央~遠位端約9cm遺存、遠位端わざかに破損		
555-025	SK3017	ドブクマネズミ	右	下顎骨	歯の磨耗なし	表 6	若い
555-026	SK3017	ドブクマネズミ	右	下顎骨	切歎部は焼骨	表 6	

表8-2 動物骨鑑定表

資料整理番号	報告書遺構番号	種名	出土部位		詳細	計測値 (mm)	備考
			左右	部位			
555-027	SK3017	ドブロクマネズミ	左	下顎骨		表6	切歯は大きい
555-028	SK3017	ドブロクマネズミ	左	上顎骨	歯の磨耗なし		若い
555-029	SK3017	ドブロクマネズミ	左	上顎切歯			
555-030	SK3017	ドブロクマネズミ	左	肩甲骨			
555-031	SK3017	ドブロクマネズミ	左	上腕骨	近位端未癒合	骨幹+遠位端長 27.51	若い
555-032	SK3017	ドブロクマネズミ	左	上腕骨		全長 27.43	
555-033	SK3017	ドブロクマネズミ	左	上腕骨		全長 27.24	
555-034	SK3017	ドブロクマネズミ	右	上腕骨		全長 29.08	
555-035	SK3017	ドブロクマネズミ	右	大腿骨	遠位端未癒合、大転子破損		若い
555-036	SK3017	ドブロクマネズミ	左	寛骨	腸骨後、恥骨下枝破損		
555-037	SK3017	ドブロクマネズミ	左	寛骨	腸骨後、恥骨下枝破損		
555-038	SK3017	ドブロクマネズミ	右	寛骨		腸骨量一坐骨結節 43.01	
555-039	SK3017	ドブロクマネズミ	右	寛骨	腸骨稜破損		
555-040	SK3017	ドブロクマネズミ	右	寛骨	腸骨稜破損		
555-041	SK3017	ドブロクマネズミ	右	寛骨	坐骨のみ遺存		
555-042	SK3017	ドブロクマネズミ	一	腰椎	3点遺存		
555-043	SK3017	ドブロクマネズミ	一	尾椎	1点遺存		
555-044	SK3017	シカ	右	上腕骨	大結節破損	表4	出土位置番号R555-10-a
555-045	SK3017	シカ	右	橈骨		表4	出土位置番号R555-10-b
555-046	SK3017	シカ	右	肩甲骨	肩甲棘の外側部と内側縁破損	表3	出土位置番号R555-3
555-047	SK3017	ドブロクマネズミ	右	脛骨	腓骨破損、近位端未癒合	骨幹+遠位端長 34.97	出土位置番号R555-43
555-048	SK3017	ドブロクマネズミ	右	下顎骨		表6	出土位置番号R555-46
506-7-a	第2b-3層中	コサギ?	左	寛骨			チュウサギよりやや小
506-7-b	第2b-3層中	カモ科?	一	頸椎	椎体前面のやや後方で切断		解体痕あり
506-7-c	第2b-3層中	ニワトリ?	左	尺骨		骨幹長 43.39	両骨端未骨化
506-7-d	第2b-3層中	ニワトリ?	左	肩甲骨	関節窩から約2cm遺存		関節窩未骨化

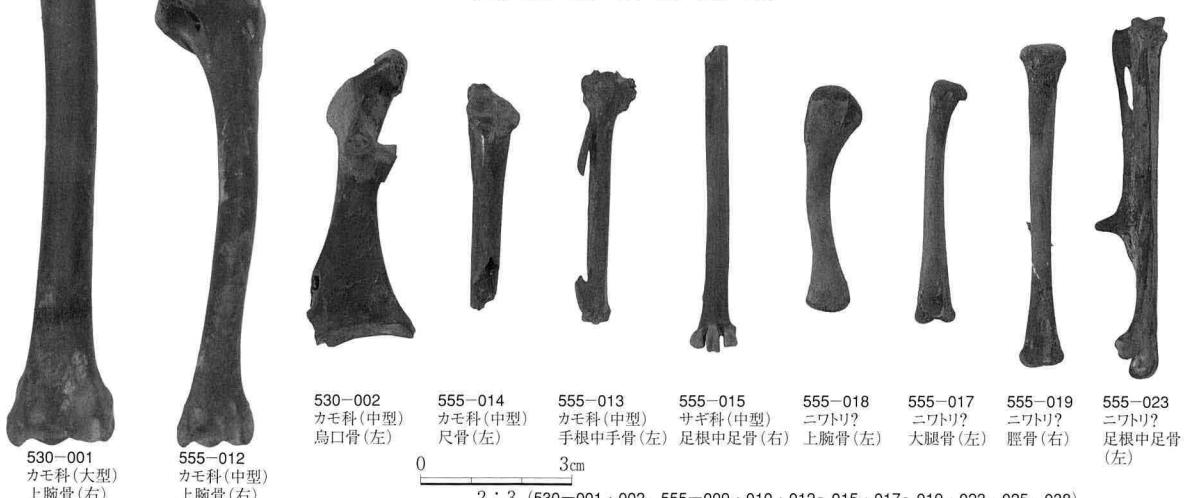
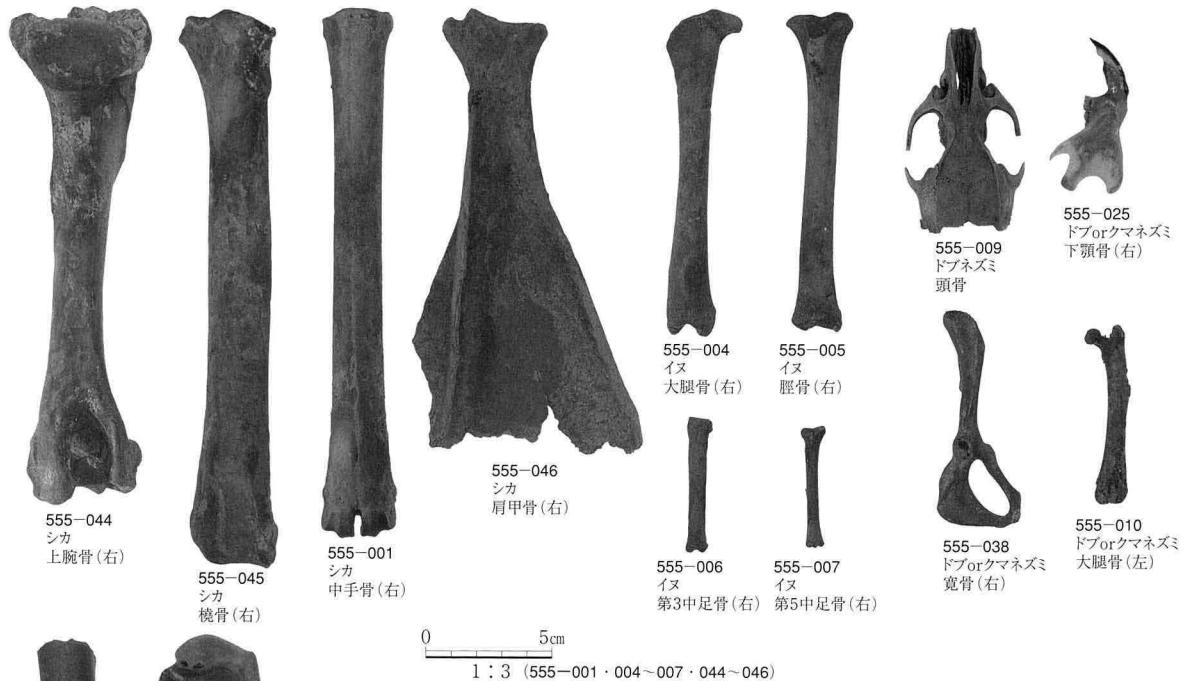


写真38 出土した哺乳類骨・鳥類骨

## 5-2. 魚骨の分析

丸山真史(京都大学大学院人間・環境学研究科)

松井章(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)

### a) 概要

今回、報告する魚類遺存体は大坂城三ノ丸跡の土壙SK3017から出土したものである。共伴する陶磁器から、このSK3017の時期は豊臣後期(1598年から1615年頃)と考えられる。本稿で報告する魚骨のほかに哺乳類、鳥類も出土しており、さらに木製の漆椀や皿、土師質の皿、焼塩壺、大量の箸も出土している。魚類遺存体は土壙SK3017の埋土を水で溶いて泥化させ、1mm目の篩上で水洗選別を行ったものの中から、魚骨と鱗を選別したものである。今回は魚骨についてのみ報告する。

魚骨は総破片数221点にのぼり、そのうち146点を同定することができた(表9・写真36)。出土種の中では、マダイが最も多く、破片数97点と61%を占め、次いでシイラが25点、マダイなどを含むタイ科が10点、マダラが6点となる(図29)。刃物傷が見られるのは17点、被熱して変色しているものが2点ある。記載する魚類の標準体長は、手元の現生骨格標本と比較して推定した値である。

### b) 種類別の特徴

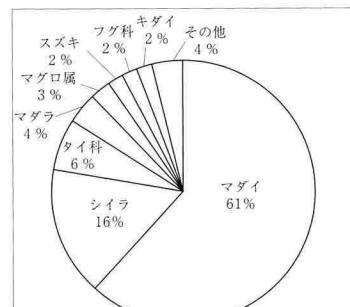


図29 魚類の組成 (NISP-157)

マダラ 椎骨が6点出土しており、大きさは全て60cm以上と推定される。

ボラ科 主上顎骨が1点(右)のみ出土しており、大きさは体長40cmから50cmと推定される。

スズキ 副蝶形骨・方骨(右)・椎骨が各1点出土している。本種は成長とともに呼称が変わる出世魚であり、関西では体長30cm未満をセイゴ、30cm以上60cm未満をフッコ、60cm以上をスズキと称する。出土資料は全て体長40cmから50cmのフッコ級と推測される。

アジ科 椎骨が1点のみ出土しており、大きさは体長10cmから20cmと推定される。本科には小型のマアジやムロアジなど、大型のロウニンアジやシマアジなどが含まれる。出土資料は、小型のマアジやムロアジの仲間である。

ブリ属 主上顎骨(左)と歯骨(左)が各1点、計2点が出土しており、体長60cm以上と推定される。

シイラ 椎骨が18点、角骨が2点(左1右1)、前上顎骨(右)・主上顎骨(右)・歯骨(左)・準下尾骨・尾部棒状骨が各1点、計25点が出土している。大きさは小さいもので体長40cmから50cm、大きいものは80cm以上と推定される。

マダイ 椎骨17点・舌顎骨7点(左4右3)・口蓋骨(左5右1)・主上顎骨(左)が各6点など、計97点が出土している。前頭骨など頭部の骨4点は正中方向に切断される「兜割」の痕跡が見られる。このほか、椎骨8点は椎体側面が切断されており、歯骨1点・口蓋骨2点・主鰓蓋骨2点・前鰓蓋骨3点・計22点に細かな刃物傷やぶつ切りにされた切断痕が見られる。

キダイ 前頭骨が2点、上後頭骨が1点、計3点が出土しており、体長20cmから30cmと推測される。

タイ科 椎骨6点・中翼状骨2点・前鰓蓋骨(左)・擬鎖骨(左)が各1点ずつ、計10点が出土している。大きさは、すべて体長30cm以上と推測される。椎骨1点は被熱しており白色を呈する。本科はマダイ

とキダイのほかに、クロダイやチダイなどを含むが、出土資料はそれぞれの大きさからみて、大型のタイ科であるマダイやクロダイの可能性が高い。

マグロ属 基後頭骨・前上顎骨(右)・主上顎骨(右)・方骨(右)が各1点、計4点が出土している。大きさは1点が体長40cmから50cm、3点が50cmから60cmと推定される。

カマス科 口蓋骨(左)1点が出土しており、大きさは体長30cmから40cmと推定される。

ヒラメ 椎骨1点が出土しており、大きさは体長60cm以上と推定される。

フグ科 前上顎骨(右)・前鰓蓋骨(左)・不明部位が各1点、計3点が出土している。大きさは体長10cmから20cmと推定される。前上顎骨は結合部が切断されている。

### c) マダイの解体痕について

マダイには頭部の骨に切傷や切断の痕跡が見られるものが少くない(註1)。前頭骨を含む神経頭骨5点と歯骨1点は、正中方向に頭部を一気に切断する「兜割」の痕跡が見られる。神経頭骨の切断は全て正中方向であるが、正中線上の右側か左側で切断されており、3分割されたと考えられる。神経頭骨の1点と上後頭骨2点は、後位部が正中方向に対して垂直に切断されており、頭部と胴部が切り離された痕跡が見られる。歯骨は左右の結合部に切断痕が見られ、頭部が正中線上で2分割されたものと推測される。歯骨に残された刃物の痕跡は正中方向であり、吻部から尾方へ庖丁が入ったと推測される。口蓋骨2点は正中方向あるいは正中方向に対して垂直方向に切断されている。主鰓蓋骨1点は正中方向に対して斜めに切断されている。前鰓蓋骨1点は屈曲部に切傷が見られ、他の2点は正中方向と正中方向に対して垂直に切断されている。前鰓蓋骨の切傷は外側に見られ、外側から庖丁を当てたことがわかる。椎骨は最も多く8点に切断の痕跡が見られた。腹椎の左側あるいは右側のどちらかの横突起が切断されているものが6点、右側の横突起と前位面が切断されているものが1点、両側の横突起と後位面が切断されているものが1点である。腹椎の横突起の切断は2枚あるいは3枚におろされた痕跡で、前位面あるいは後位面の切断はぶつ切りにされた痕跡と考えられる。両側の横突起が切断されているものがあり、3枚におろしたことがわかる。また、横突起と前後位面が切断されているものがあり、身をおろした後に「あら」をぶつ切りにしたこともわかる。以上から、①頭部と胴部を切断、②頭部は3分割に「兜割」、③頭部はさらに細かく切り分ける。④胴部は2枚あるいは3枚におろして身を取り外した後、⑤適当な大きさにぶつ切りしたと考えられる(図30)。このようなマダイの解体は、江戸の遺跡から出土したマダイでも推定されている[金子浩昌1991]。これらを比較すると、切断方向がやや異なるものの、ほぼ同様の場所で切断されている。各地で同様の解体方法が普及したと考えられ、料理本の普及との関連が想定される。

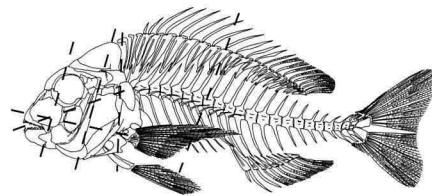


図30 マダイの解体痕

このようなマダイの解体痕は、身を取るためだけでなく、頭部を料理に利用したものと考えられる。遺跡から出土するマダイの「兜割」は、2分割と3分割の2つの方法がある。3分割は現代の料理には用いられない方法で、「潮煮」(註2)に利用された可能性が指摘されている[岡嶋隆史2004]。解体痕が見られる資料は体長30cm以上の中型から大型の個体ばかりで、体長30cm未満のものは少ない。小

型のマダイは尾頭付きでお膳に上がったと想定される。それに対して、中型や大型のマダイは、身を取り外した後、「あら」を「潮煮」や「兜煮」などに利用したのであろう。

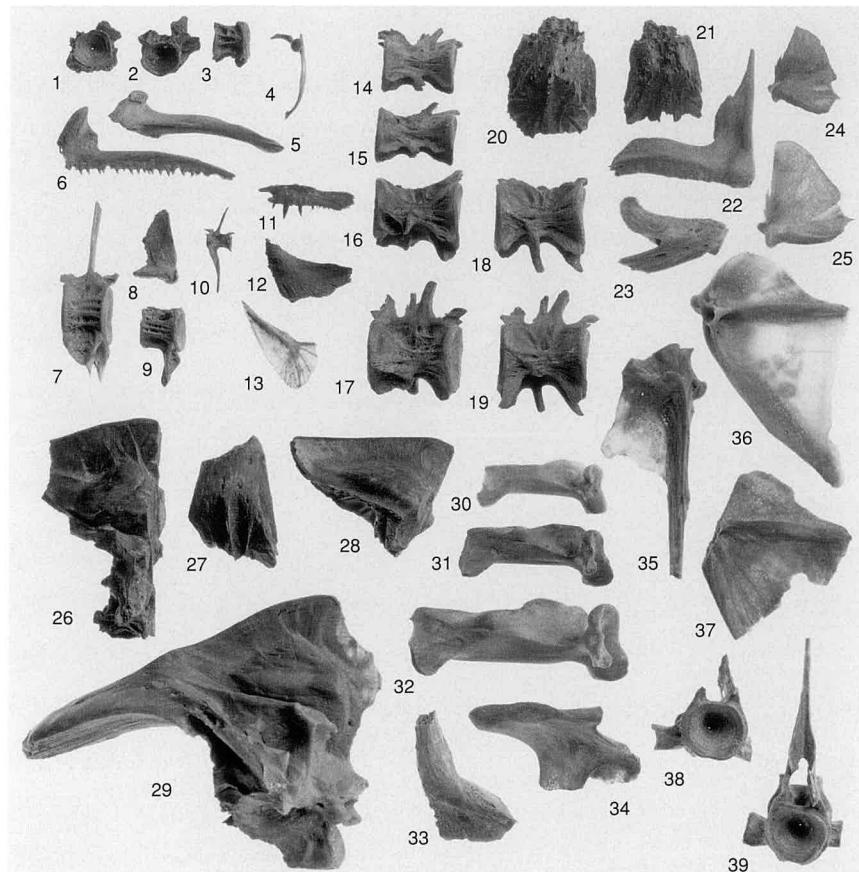
#### d)魚類消費の様相

最も多く出土したマダイは、骨が大きく堅固であることから、イヌなどによる食害の影響は小さく、縄文貝塚以来、遺跡から最多の出土量を示すことが多い。一般にマダイが遺跡から多く出土する理由に、発掘中に目につきやすいこともあげられる。本遺跡でも最小個体数にして6個体と最多の出土を見る(註3)。前述のように、頭部が解体されていることから、骨も料理に利用されたと考えられる。小さなものは尾頭付き、大きなものは頭部を「潮煮」や「兜煮」などに利用された可能性がある。キダイは、関西では「レンコ鯛」として馴染みの魚である。出土資料は前頭骨と上後頭骨で、いずれもマダイのような「兜割」は見られず、魚体が小さいのでマダイの代替品として尾頭付きでお膳に上がったことが想定される。シイラ・マグロ属・マダラは瀬戸内海で漁獲されず、遠隔地から搬入されたものと考えられる。大坂城下町魚市場跡では3種とも出土しており[久保和士1999]、大坂城三ノ丸跡(大阪府警本部地点)はシイラとマダラが出土している[丸山真史・松井章2006]。これらは各遺跡からの出土量は少ないが、大坂城およびその城下町から広範囲に出土し、干物や塩蔵品として保存加工され、流通品として出回っていたと考えられる。

出土した魚種と季節性を考察すると、近世初頭では保存や輸送の技術が発達しておらず、それぞれの魚類の漁獲季節と同じであると仮定すると次のようになる。マダラは夏には深場、冬には浅場へと移動することから、漁獲されるのは浅場へと移動してくる冬期である。この他は漁獲される季節がさほど限定されない。これに対して、SK3017から大坂や京都の夏の風物詩であるハモが出土していない。大坂城下町跡でハモ属の出土は多いにもかかわらず出土していないことは、ハモが盛んに漁獲、消費される夏期の廃棄物が含まれていない可能性が高い。冬であれば、大阪湾でも馴染みのボラ科・アジ科・ブリ属・カマス科・ヒラメ・フグ科などは鮮魚で運ばれたものもあっただろう。大坂城下町魚市場跡から出土した魚骨と比較すると、本資料は魚種が限定され、大型魚が多いことが特徴である。魚市場跡から多量に見つかるイワシ・アジ・トビウオの仲間は、1mm目の篩を用いたにもかかわらず採取されていない(註4)。同遺構から出土した漆器椀・大平鉢・焼塩壺・多量の箸などの食具とあわせ考えると、本資料は日常の食生活ではなく、宴会の食事を反映している可能性が高い。

#### e)まとめ

大坂城三ノ丸跡の発掘調査において、多くの魚類遺存体が出土している。マダイの出土が卓越し、約2割の骨に庖丁による切傷や切断の痕跡が見られる。これらは2枚あるいは3枚におろし、「兜割」など料理にするための解体痕である。マダイは3枚におろした後に、「あら」をぶつ切りにして調理され、お膳に上がったと考えられる。また、小型のマダイやキダイは尾頭付きと考えられる。シイラ・マグロ属・マダラは太平洋あるいは日本海沿岸部の地域から搬入されたもので、これらが占める割合はマダイやタイ科の次に高く、遠隔地流通の進展が窺える。マダラの出土から、秋から冬にかけて廃棄された食料残滓と推測される。大阪の夏には欠かせないハモが出土していないこともその傍証の一つとなるだろう。キダイやフグ科など今日の大坂でも好まれる種類やアジ科やカマス科など馴染みの



1 ~ 3 マダラ椎骨  
 4 ボラ科主上顎骨R  
 5・6 マグロ属  
 (5 主上顎骨R 6 前上顎骨R)  
 7 ヒラメ椎骨  
 8・9 スズキ  
 (8 方骨L 9 椎骨)  
 10 アジ科椎骨  
 11 カマス科口蓋骨L  
 12・13 フグ科  
 (12 前上顎骨R 13 前鰓蓋骨L)  
 14~19 シイラ椎骨  
 20・21 キダイ前頭骨  
 22~39 マダイ  
 (22 前上顎骨R 23 齒骨R  
 24・25 方骨L 26 神経頭骨  
 27 前頭骨 28 上後頭骨  
 29 神経頭骨 30~32 主上顎骨L  
 33 前鰓蓋骨R 34 口蓋骨L  
 35 舌鋸骨L 36・37 主鰓蓋骨L  
 38・39 椎骨)

写真39 SK3017出土の魚骨

種類も出土しており、多様な魚料理が饗されたようである。他の遺物も考慮すると宴会の食事を反映している可能性が高い。

註)

- (1)ここで使用する「頭部」とは、魚の見た目の頭部であり、神経頭骨、顎骨以外に内蔵骨を含めて指す。
- (2)潮煮は、現代の潮汁とほとんど同じものであり、出汁が少なく具が大きい[岡嶋隆史2004]。
- (3)個体数は左右を分けて重複する部位の最大数に、推定体長が重複しないものを加味して算定した。
- (4)分析資料は水洗選別した土壤の一部であり、ほかにイワシなどの微小骨が含まれている可能性がある。

表9 種名表

硬骨魚綱 Osteichthyes		アジ科 Carangidae		カマス科 Sphyraenidae
タラ目 Gadiformes		ブリ属の一種 Seriola sp.		カマス科の一種 Sphyraenidae, gen. et sp. indet.
タラ科 Gadidae		アジ科の一種 Carangidae, gen. et sp. indet.		サバ科 Scombridae
マダラ <i>Gadus macrocephalus</i>		シイラ科 Coryphaenidae		マグロ属の一種 Thunnus sp.
ボラ目 Mugiliformes		シイラ <i>Coryphaena hippurus</i>		カレイ目 Pleuronectiformes
ボラ科 Mugilidae		タイ科 Sparidae		ヒラメ科 Bothidae
ボラ科の一種 Mugilidae gen. et sp. indet.		マダイ <i>Pagrus major</i>		ヒラメ <i>Paralichthys olivaceus</i>
スズキ目 Percidae		キダイ <i>Dentex tunifrons</i>		フグ目 Tetraodontiformes
スズキ科 Percichthyidae		タイ科の一種 Sparidae, gen. et sp. indet.		フグ科 Tetraodontidae
スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>				フグ科の一種 Tetraodontidae, gen. et sp. indet.

表10 集計表

SK3017	前頭骨		前上顎骨		主上顎骨		歯骨		角骨		方骨		舌顎骨		主鰓蓋骨		前鰓蓋骨		椎骨	その他	計
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R			
マダラ																			6		6
ボラ科						1															1
スズキ																				1	3
アジ科																				1	1
ブリ属																				2	
シイラ			1		1	1			1	1									18	尾部棒状骨 1	25
マダイ	5	2	2	6	1	1	2		3	1	4	3	1	3	1	2			17	※欄外参照	97
キダイ	2																			上後頭骨 1	3
タイ科																			1	6	擬鎖骨 L 1 中翼状骨 L 2
マグロ属																				基後頭骨 1	4
カマス科																				口蓋骨 L 1	1
ヒラメ																			1		1
フグ科					1														部位名不明 1		3

※島頭骨 L 1 R 2 下尾骨 1 角舌骨 L 4 R 1 基後頭骨 2 擬鎖骨 R 2 口蓋骨 L 5 R 1 鋼骨 1 上擬鎖骨 L 1 R 2 上後頭骨 5 上耳骨 L 1 R 1 上舌骨 L 1 R 1 上尾骨 1 神經頭骨 4 蝶耳骨 L 1 鼻骨 L 2 副蝶形骨 2 翼耳骨 R 2

### 5-3. 貝の分析

ここではOS06-7次調査で出土した貝類について報告する。同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954・波部忠重1961]を利用している。個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

表11 出土貝類種名一覧

腹足綱 Gastropoda	
Notohaliotis属の一種(アワビ類)	Notohaliotis sp.
サザエ <i>Turbo (Batillus) cornutus</i> Solander	
アカニシ <i>Rapana thomasiana</i> (Crosse)	
バイ <i>Babyronia japonica</i> (Reeve)	
二枚貝綱 Bivalvia	
ハイガイ <i>Anadara (Tegillarca) granosa bisenensis</i> Schenck et Reinhart	
アカガイ <i>Anadara (Scapharca) broughtonii</i> (Schrenck)	
イタボガキ <i>Ostrea denselamellosa</i> Lischke	
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i> (Roeding)	

出土した貝類は8種、350個体にのぼる(表11・12)。いずれも豊臣後期に属する資料である。中でもSK3017の資料が346個体と大半を占めていることから、以下では同遺構出土資料について述べる。

SK3017は豊臣後期の廃棄土壌で、貝種構成をみると、サザエが73%と多数を占め、ハマグリ(15.6%)・アカニシ(4.6%)・イタボガキ(3.8%)と続く。個別の貝種をみると、まずサザエには遠隔地から持ち込まれたとみられる有棘型が3個体含まれる。またアカニシとともに、大半の個体に調理痕とみられる抉りや孔が観察された[池田研2006]。ハマグリは破損が目立ち計測可能な資料は僅かであったが、殻高値は21.9~61.0mmと大小の個体が含まれる。

さて、大坂城・城下町におけるこれまでの調査結果によると豊臣期を画期として貝種構成が激変し、中世ではヤマトシジミが大半を占め、汽水・淡水性種を中心に限定された種から構成されるのに対し、豊臣後期以降は鹹水性種が主体をなし種数も激増する。また、新しく加わった貝種には、潜水して捕獲する必要があるアワビ類やイワガキ、遠隔地から持ち込まれたホタテガイや有棘型のサザエ、外洋性のチョウセンハマグリなどが含まれている。さらに豊臣期以降についても、豊臣期と徳川期では変化が見られ、豊臣期にはサザエ・イタボガキ・ハマグリ・ヤマトシジミ・アカニシなどの比率が高いのに対し、徳川期にはハマグリが圧倒的な割合を占めるようになる[池田2005・2006]。こうした傾向を踏まえた上でSK3017出土資料を見ると、遠隔地から持ち込まれた資料を含む多数の鹹水性種から構成されており、中でもサザエ・ハマグリ・アカニシ・イタボガキの比率が高いなど、豊臣期の傾向によく合致したものであると評価されよう。

表12 調査地出土貝類一覧

地層・遺構名	時期	ハマグリ	アカガイ	ハイガイ	イタボガキ	アカニシ	アワビ類	サザエ	バイ	合計
第2a層	豊臣後期				1					1
第3~5層	豊臣後期							1		1
SD2072	豊臣後期					1				1
SX2244	豊臣後期					●		1		1
SK3017	豊臣後期	54	1	4	13	16	4	殻253蓋19	1	346

表註 1. ●は殻頂・殻口が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの。

2. SK3017のハイガイは殻合1個体を含む。SK3017のサザエは有棘型3個体を含む。

## 6. まとめ

今回の調査地では大坂本願寺期の遺構は検出できなかったものの、豊臣前・後期、徳川期の遺構と遺物を明らかにすることができた。

豊臣前期の遺構は建物礎石と溝を検出し、ドーンセンター調査地の武家屋敷が当地にも拡がることがわかった。金箔押桐紋飾瓦や熨斗瓦が出土しているため、大名の屋敷地であった可能性が高い。

三ノ丸造成時の盛土は約2.6mに達し、南東から北西方向に盛土が進行したことが明らかとなった。防御用に造成された三ノ丸工事に関する貴重な情報といえる。

三ノ丸造成後、土を敷き固めたり瓦敷きを行い南北方向に道路が設けられ、東側を一段高くして建物敷地が造成されていた。

この道路は第3層の盛土で埋められ、平坦面が造成される。その上にはもとの道路に直交して東西方向の柵を築き、その南側に井戸や廃棄土壠を設けていた。廃棄土壠SK3017からは、多数の容器と共に動物骨・魚骨・貝類が出土し、豊臣後期の三ノ丸における食膳形態の一様相が示された。

廃棄土壠や柵が埋められたのち当地は整地され、第2層上面には建物や瓦組みの区画溝による建物敷地、柵が設けられていた。しかし、これらは大坂夏ノ陣の戦災で焼け落ち、その焼土が整理された後、徳川期になると礎石列や井戸が設けられ、一時期、屋敷地になるといった変遷がうかがえた。

三ノ丸北辺の各調査において、豊臣後期の遺構は三ノ丸の石垣と夏ノ陣の焼土層以外に明らかになっている遺構は少ない。今回の調査地で見つかった豊臣後期の道路や屋敷地・廃棄土壠は、慶長年間の大坂城北辺の空間構造を復元するための貴重な資料といえる。

### 参考文献

- 安部みき子2002、「大坂城跡出土の人骨・獣骨」：大阪府文化財調査研究センター編『大坂城址』Ⅱ、pp.306-348  
池田研2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」：大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集』、pp.859-886  
2006、「大坂城跡(03-1・OKS99)出土の貝類」：大阪府文化財センター編『大坂城址』Ⅲ、pp.543-552  
岡嶋隆史2004、「真鯛頭部の解体法について」：『動物考古学』21号 動物考古学研究会、pp.91-101  
大阪市文化財協会1988、『大坂城跡』Ⅲ  
2002、『大坂城跡』Ⅵ  
2003、『大坂城跡』Ⅶ  
大阪城天守閣1993、『特別展大坂城下町』  
大阪府文化財センター2006、『大坂城址』Ⅲ  
追手門学院校地学術調査委員会1982、『大坂城三の丸跡』  
金子浩昌1991、「江戸市中の動物」：江戸遺跡研究会編『甦る江戸』 新人物往来社、pp.181-205  
吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社  
久保和士1999、「近世大坂における水産物の流通と消費」：『動物と人間の考古学』 真陽社、pp.137-179  
黒田慶一1996、「瓦」：大和郡山市教育委員会編『豊臣秀長とその時代』  
2005、「大手前一丁目所在遺跡(大坂城跡)」：大阪市史編纂所・大阪市史料調査会編『新修大阪市史』史料編第一巻、考古資料編、pp.402-409  
徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構発掘調査団1977、『徳川時代大坂城外郭関連石垣遺構調査報告』  
波部忠重1961、『続原色日本貝類図鑑』 保育社  
藤澤良祐2002、「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」：財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター編『研究紀要』第10輯、pp.53-175  
丸山真史・松井章2006、「大坂城三の丸跡から出土の魚類遺存体」：大阪府文化財センター編『大坂城址』Ⅲ、pp.445-464  
宮崎泰史1993、「ドーンセンター建設に伴う大坂城跡の調査」：『大阪府下埋蔵文化財研究会(第27回)資料』、pp.65-71  
宮本佐知子1989、「「淀屋」?の蔵跡みつかる」：大阪市文化財協会編『葦火』19号、pp.6-7



